

---

# キミに逢えたから

hyo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミに逢えたから

### 【Nコード】

N1226F

### 【作者名】

h y o

### 【あらすじ】

恋を知らない16歳の日向が1人の少年と出会い痛いほどの恋にのめりこむ…

## 第一話 夏の雨（前書き）

この作品は私のオンライン小説のデビュー作です。

自サイトから引っ張ってきました。

多少手直しはしてありますが、誤字脱字、見苦しい表現などありましたらご一報くださいませ。

実話を織り交ぜておりますので「ありえない」と思うところが実話部分だったりします（笑）

どこらへんが実話なのか探りながら読むのも楽しいかも知れません（笑）

では、拙い作品ではありますが宜しくお願いします。

## 第一話 夏の雨

毎年、お盆の時期になると雨の日が多くなる。

この雨が降ると夏は終わりなんだと感じてしまう。

周りの友達には「夏は出会いの季節だ」と浮き足立つけど、あたしには関係ない、どうでもいい事だ…。

別に興味が無いわけじゃないし、それなりに恋もしたけど、虚しくて、淋しくて…。

『恋愛とはそういうものだ』と、あきらめがあった。

「あんた、まだ16なのにさ、人生損してるよ?」

そう言うのは中学時代の友人、月島唯衣だ。

そういう自分は中学時代から好きな男に未だに告白できないでいる…。

しかし、そのモヤモヤしている自分の気持ちすら楽しいと感じているみたいだ。

「ひなさあ、いつからそんな冷めた子になったの?」

そう聞かれても、私にもわからない。

…いつからだろう?

そもそも、「恋愛」したのはいつが最後だった?

親友の彼氏を奪おうとして失敗…でも、そいつに本気で恋はしていない。

ただ、親友の反応を見たかっただけ…。

友達に男友達を紹介してもらった事もあったっけ?

最初は乗り気だったけど、そのうちしらけた…。

そもそも、「恋」って何よ?

ドキドキして、熱くなって、ムキになって、泣きたくなって…  
感情の抑制がうまく出来なくなる…？  
そんな恋をあたしは望んでるのかな…？  
そもそもそんな感情ありえるの？

「そういう人に出会えそう？」

「……さあね。」

出会えなきゃ出会えないで、無理に探そうとは思わない。  
焦ってないし、恋愛してなくても生きていけるって思ってるから。

……。

かわいくない……

「可愛げがない」そんな事、自分が一番わかってる。  
いつからこんなヤツになったんだろうな…？

ただそれは、恋愛に関して冷めているってことであって…。

日常生活では、  
家族にとっては「かわいい妹」、「優しい娘」だと思う。…多分。

お盆は何かと入り用だ。  
あたしは土砂降りの中、

近所の『みまストア』でお盆用品の買出しに出かけた。

あたしは店の入り口で傘をたたみ、店内を見渡した。

雨のせいで客は少なくてレジ店員も一人しかない。

この雨の中、来客が珍しいのか、レジ店員がこちらに目を向けた。

「……………」

レジ店員と目が合った瞬間、動けなくなった。

…そんな自分に正直、戸惑った。…なんで顔が熱いんだろう…？

あたしは、なんでドキドキしてるんだ…？

必要な物をキツチリ買って、家に帰っても

さっきのレジ店員の顔が頭から離れない…。

そんなモヤモヤしてるときに、友人玲夏が家に来た。

いつの間にか雨もすっかり上がり、太陽が地面を乾かしていた。

「お盆と言ったら盆踊り！祭りじゃん！」

この時期はいつも、どこかで盆踊りが行われている。

「あ、そういえば……」

言いかけてやめた。

「なにさ？言いかけてやめないでよね！」

玲夏は言葉を促そうとする。

「『みまストア』昨日は雨で中止だったけど、今日はやるのかなあ

…と、思っただけ」

「あゝ、来る途中、近くで音なってたけど、『みまストア』かなあ？  
行ってみようよ」

盆踊りは盆踊りでも、

店舗の駐車場貸切の盆踊りはなんとなく盛り上がりが違う。

田舎町のささやかな楽しみでもあった…。

屋台も出て、スーパーの店内には盆踊りからの流れで客が押し寄せ

る。

たいていの客はアイスとか、ビールとかをお買い求め。

あたしと玲夏もアイスを買おうと店内に入るもほぼ売り切れ状態…。

店から出ると雨のにおいと、生暖かい空気が体を包む。

ふと、出店の焼き鳥屋に目をやると、先程の『レジ店員』が焼き鳥を焼いていた。

……………！！

……………ダメだ！

……………彼を正視できません！！

なんでこんなに落ち着きがなくなってるんだろう、あたし????

まさか、本気????

一目惚れ、あたしが…このアタシが!!!!?

どんな人がまったく全然ちつとも分からない人に惚れた??

「どうしたの志摩ちゃん、汗すごいよ…キョドってるし…」

気が付けば顔中原因不明(?)の汗が噴出、他人にほとんど無関心な玲夏が分かるほどに

挙動不審なあたし…。

おちつけ、落ち着けあたし…。

そ、そうだよ…。例えばコレが恋だとしても一目惚れから始まる恋なんて、

きっと冷めるのも早いよ。

またいつもみたいにしらけるんだよ。うん。

明らかに戸惑ってる…そんな自分が可笑しかった。

恋をすると、普段の自分では考えもつかないぐらい臆病になる。  
彼を見つめるだけで胸が痛くなる。

彼に目を真っ直ぐに見る事ができない…。

そして、そんな自分に自己嫌悪する…その繰り返しだ。  
自分が恋をしている事を確信するのに1週間かかった…

1週間経って、唯衣に電話をかけてみた。

「好きな人ができたあつ!？」

受話器から声が漏れるくらいの大音量で唯衣の声が響いた…。

私の家には電話回線が引かれていないので、

近所の公衆電話で一方向的に相手にかける事しかできない。

私の家の近所…。

みまストアが一番近いわけで…と、自分に言い訳しながら、

みまストアの入り口に設置している公衆電話で唯衣に電話している。  
あれから、彼の苗字が『片山』ということしかわかつてはいない…。

店の中では片山君が今日も元気いっぱい働いていた。

「で、で?どんな男なのさ?ひなを魅了した男は??」

「どんな…って…」

ふと、片山君の方に目をやると、目が合った…。

「ヤバッ…!!め、め、目が合った…!」

客と目が合うことぐらい、相手は何とも思っていないのは当然わかってる。

ただ、自分が普通じゃいられなくなってしまう…。

……普通じゃいられない程…私は彼にハマってる…

そんな自分に戸惑ってる。想像もしてなかったから…



「ふんふん？ひなが冷静さを失ってしまっほどのいい男なんだな…？」

電話越しで私の反応を楽しむ唯衣。

「よし、あたし今からそっち行くから」

「は！？」

「そんないい男、一目お目にかかりたいわ」

意気揚々とする唯衣に私は少々の不安を感じてしまう…。

なにせこの女、友達の好きな男を取るのが趣味なのか？と思うような所があるからだ…

そんな私の気持ちを察してか、唯衣はすかさずこう言った…

「まさか、あんまりいい男過ぎて『唯衣が惚れたらどうしよう』？とか、思ってない？」

……凶星です。

恋をしてる時の兆候。

自分の好きな男は、他のどの女が見ても魅力的に見えるのだと思い込む、

疑心暗鬼

「まあ、いいや。今から行くから、家で待っててよ。」

そう言うのと唯衣は早々と電話を切った。

恋をするとキレイになるってよく言うけどさ…

ホントなの？

確かに、少しでも可愛く見られたいって思うから、

化粧にも服装にも気を使うようになった…でも、それは外見だけ。

内面はどんどん醜くなる気がする…。

好きな人が女の子とじゃれあってるだけで嫉妬したり、

好きな人と自分の共通の知り合いがいると、その人を利用しようとしたりする…。

別に悪い事ではないんだらうけど、なんかなあ…

そんな事を考えながら家で唯衣を待っていた。

唯衣が家に来るのにそんなに時間はかからなかった。

「おまたせ」

唯衣は玄関先で靴も脱がないで立っている。

「行くよ？」

「は？すぐ行くの？」

「お菓子を買いに行くんだよ！ひなの家にないでしょ？」  
と、理由をつけているが…

本当は『私の好きな人』を見物したくてウズウズしてるんだろう…  
気になることあるといってもたってもいられなくなる所が、唯衣らしいけど。

みまストアに着くなり辺りを落ち着きなく見回す唯衣。

「ちよつと…挙動不審なのやめなよ…」

注意する私の事などお構いナシに唯衣は私に訊ねてくる…

「ねえ、ひなの想い人、今日はいないの??？」

辺りを見渡してみる。

さつき唯衣と電話してたときにはいたんだけど…

「いない」

私の一言に唯衣はがっかりする…。

そんな唯衣に私は言った。

「お菓子を…買いに来たんでしょ？」

「そうだけどさあ…」

納得いかないといった歯切れの悪い返事をしながらお菓子を物色する唯衣。

そんな私達の後ろを女性従業員が通りかかった。たぶん正社員。

「あ……………」

私の反応を敏感に察知した唯衣は私に問いかける。

「誰？知ってる人？」

「福井美咲さんっていつて、小・中学校の時はよく一緒に登下校してくれたな…」

あの人の家に遊びに行ったこともあるし。憧れだったなあ…」

「ふゝゝん？でも、ひなには気付かなかったみたいけど？」

「うん、学年5つ違うしね…。彼女が高校入ったら接点がなくなつた。

通学路が違うから一緒に登下校も出来ないしね。」

キレイになったなあ…。福井さん。昔はかわいって感じだったのに。

「今でも仲が良かったら好きな人との仲も取りもってもらえたかもしれないのにね。…よし、これとこれを買おう」

人の話を真面目に聞かずに買うお菓子に悩んでいたのかこの女は…それでも不服そうに辺りを見渡す…。

そこに、片山君が通りすぎた。

片山君だ…私が口にするよりも先に、唯衣が反応を見せた。

さすが唯衣、…めざとい！

……やっぱり片山君、唯衣の好み！？  
すると唯衣は口を開いた。

「片山だ！！」

バカッ！見に来たのバレるじゃん！！

唯衣が大声で彼の名前を発した事ですっかり動揺した私は必死に唯衣の口を塞いだ。

私はそして、冷静になって考えた…。

………

…『片山だ！！』???

唯衣とみまストアに来たのは片山君を好きになってから初めてだ。  
なぜ唯衣は彼の名前を口走ったんだ????

「……………」  
「……………」

私はゆっくり唯衣の口から手を離した。

「なんで知ってんの…?」

私は恐る恐る聞くと唯衣の口からあっけらかんとした答えが返ってきた。

「だって、同級生だもん」

「……は?」

「だから同級生なんだってば」

唯衣と私は転校先の中学の同級生で、片山くんは唯衣の元いた学校の同級生だそうで。

「ひな…。もしかして好きな人って……片山?」  
「……………」

この時私は思った。

世の中、狭い!!!!…つか、この町狭い!と。

帰り道、唯衣は申し訳なさそうに言った。

「ごめんね…。あたし、片山とは仲悪かったんだ…」

私は唯衣がなぜそんな事を言い出したのか、理解できなくて聞いた。

「唯衣は私が片山くん、好きになるの反対?」

「まさかあ! ひながようやく好きになれた男だよ? 反対なわけないじゃん!」

ただ、お膳立てみたいな事はしてあげられないからさ」

ああ。なるほどね…

もし、唯衣が片山君と仲がよければ、「紹介してっ」って流れになつてたと思う。

唯衣も私がそれを期待してると思って、そういうことを言ったのね…。

「大丈夫。楽しんで好きな人と仲良くなるうなんて考えてないから」  
…なんて、強がりを書いてみせていたけど、時間は無限にあるわけじゃなかったんだ。

もう冬になってしまった。いや、もう春になるうとしてる…

片山君が好きになってから、もう半年が過ぎようとしていた。

なんの進展もないまま、見つめるだけで半年。

スーパーのレジ店員になんて言って話しかけようか…。悩んで半年。

他の人が見たら今の私は滑稽に映るだろう…。

私が……他の人をそう見ていたように…。

気がつけば、片山くんは少し大人っぽくなった…。

以前の元気な男の子という雰囲気、陰のある男の子という間逆の雰囲気…。

それが、近寄りがたさに拍車をかける要因の一つなのかな…？

「なーまーいーきー」

家に遊びに来て、「ホットケーキが食べたい」と言っただけで聞かない唯衣と

みまストアで買い物をしてた時の唯衣の一言だった。

「ピアスなんかしちゃってさ、片山のクセに。なーまーいーきー！」

片山のクセに…って所にトゲがあるが、私も男の人のピアスには少し抵抗があった。

考え方が古いんだろうけど。

「たしか、ひなって硬派な感じの男が良かったんじゃないの？なんで片山なの??？」

それは……出会った時は健全な男子っぽくて……。

それを口に出すと、またつかかって来そうだから飲み込んだけど……。

「ねえ、ひな……。気、悪くしないで欲しいんだけどさ……」

……。

私が『一番聞きたくない』言葉を発する時、唯衣は必ずこういう言い方をする。

私は息を飲み込む。

「片山……彼女いたりしてね……？」

私も薄々感じてはいたんだ……。

「あ、いや、思い過ごしかもしれないけど……っ」

唯衣が慌ててとりつくろった。その後に深刻な顔になって、

「やって後悔するより、やらないで後悔した方が悔しいと思うんだ……？」

告白して振られるより、告白しないで相手に彼女が出来た方が悔しい……。

それはなんとなくわかるけど、もし、すでに片山君に彼女がいたら？

告白して振られた上に彼女がいるなんて言われたら……。

ダブルパンチだよな……？傷つくのが怖い。

恋は人を臆病にする……。イライラする……。

告白なんてされたことないから、わからないけど……

知らない異性から告白されるってどんな感じなんだろう？

嬉しいのかな……？やっぱり不気味に感じる？

ずっとモヤモヤした気持ちのまま、見たくもない真実を知ってしまった……。

『日頃のご愛顧ありがとうございます。』

当店「みまストア」は本年3月31日に

完全閉店する事になりました。

長年のご愛顧、誠に感謝致します。』

ある日みまストアに行ったときに、入り口に張ってある張り紙を見て私は凍りついた。

「……………あと、一ヶ月…？」

時間は無限にあるわけじゃない…。

わかっていたはずだった。

モタモタしてるうちに周囲は私をおいて変わっていく…。

わかってはいたけど…。

結局…そのまま一ヶ月はあっという間に過ぎて、

舞い上がった私の恋は、不完全燃焼のまま終わりを告げた。

日向16歳。…桜散る、短い季節の出来事…。

## 第2話 夢と現実

恋とは病みたいなものだと私はつくづく思うのです。

好きな人が目の前にいるだけで、動悸がして、鼓動が早くなって、high（躁）になって、そして言いたい事が言えない。

好きな人が目の前にいないだけで、その人の事ばかり考えてしまう…。

…好きな人が病の原因なはずなのに、好きな人じゃなければその病を癒せない。まあ、失恋という荒療治があるけど…。

『みまストア』が閉店してから半年が経った…夏、真つ盛り。私は、片山君を好きだった事自体が夢だったんじゃないか？と思うほど、彼に会う前と何も変わらない生活をしていた。変わった事と言えば、あまり電話をすることがなくなった事。『みまストア』があった時は頻繁に唯衣と電話をかけていた。…片山くん見たさに。

でも、最近はバイトに明け暮れていた。別に私から電話をかけなくても、唯衣は私のバイト先のスーパーに客として来るし、バイトが終わればそのまま唯衣と遊んでいるし…。

遊んでいると言うか…つき合わされている？？

唯衣の片思いの彼の家まで自転車でドライブ…。

……。

彼の家まで行ったからって、別に告白するわけでもなんでもない。

…ただ、彼の家の前を通りかかるだけでなんだかどきどきする…らしい。

恋する乙女というのはこういうものか？？まあ、私も玲夏もヒマだから付き合ってるけど、何が楽しいのかは不明…。ただ、道中の唯衣との会話は楽しい。それがつきあってる理由かな。いつもと変わらない日常。



…そのはずだった。  
いつもと変わらない道順で自転車を走らせていた…。  
その途中に姉がひいきにしているガソリンスタンドがある。  
いつもはただ通り過ぎるだけだったのに、どうしてだろう？この日  
だけは違った。給油している店員に何故か目が行った…。

「……………！」

偶然が運命だと錯覚してしまいそんな瞬間だった。  
神様がもう一度チャンスを与えたのか？…とも思った。  
自転車で通り過ぎるだけの時間がとてもゆっくりに感じた。  
唯衣は思いつき私を振り返り驚きの表情で、唇の動きだけで何か  
を伝えようとしていた。

「か・た・や・ま」

唯衣の唇は確かにそう言っていた。

私は何も言わず、ソレを確認することもなく、力強くうなづいた。  
そう、給油していた店員は片山くんだった…。

ガソリンスタンドを通り過ぎてしばらくした後、唯衣が話し出した。

「あたしが何言ってたかわかってる？」

「え？片山って言ってたんじゃないの？」

私がそう答えると唯衣の表情が明るくなり、ハイテンションになっ  
た。

「よかったね〜〜！いや〜〜すごい〜〜！これって運命？？」  
「？」

唯衣はまるで自分の事のように喜んでくれている。

私だってうれしい…。私だって嬉しい…。勝手に目が潤んできちや  
うのが自分でもわかる。

恥ずかしいくらいあたしは舞い上がった…。

季節は冬。…私が再び同じ人に恋をして、5ヶ月。

また、同じ事の繰り返し…。いつも見てるだけ。  
いつ、彼がバイトを辞めてしまつか分からない…  
いつ……この店が潰れてしまつか分からない…  
いつもあの日が私を脅迫してる…。

時期はもうすぐクリスマス。  
渡せるかどうか分からないプレゼントを買い、ソワソワしている私。

今度こそは失敗できない。

告白できないまま失恋するのはもういやだ。

クリスマスに勝負を賭けよう！と覚悟を決めていた…！

…のに…。

クリスマスイヴに体調を崩し、泥の様に眠り、目が覚めたときには  
12月26日！の夜…

仕事から帰宅し、居間でくつろいでる姉が部屋から出てきた私に氣付き言った。

「おはよう。具合どうよ？」

「ん…おなかすいた…」

テーブルの上にはケーキとか、ごちそうとか、が並んでいた。

二人で暮らしている姉と私はクリスマスイヴに二人仲良く体調を崩し、食べ物を受け付けない体になっていたため、クリスマスのごちそうがイヴの日のまま手付かずで残っていた…。

「さすがにケーキとかはやバイ（吐く）と思うよ？お粥作ってあるから食べな。」

そう言う姉はケーキを幸せそうに口に運んだ。  
なんでだか、誰かに愚痴りたくなっただ…

「クリスマスにさあ…告白しようとしてたんだあ…」

私はあきらめ口調でつぶやいていた…

すると姉は不思議そうな顔をした。

「ああ…。スタンドの少年？みまストアにいたって…？…でも

さ、クリスマスじゃなかったら告白しちゃいけないの？…来年まで待つ気なの？」

「……………！」

姉にそう言われて私はハツとした…。

そういえば、どうしてクリスマスにこだわっていたんだろうか…？？

「言いたい時が言う時なんじゃないの？」

他人事のようにも聞こえるけど、姉の言う事は正しいと思った。そして、姉の言葉が私に火をつけた…。

そうだよね…？…そうだよね！私は妙に落ち着きなくソワソワし始めた。

「あ、あの…姉ちゃん…病み上がりでこんな事言ったら怒られるだろうけど…」

私の言いたい事を察すると姉の目が輝いた…。

「行くの？行く？具合大丈夫？大丈夫だよ！行つといで…！」

女は恋愛話が好物である…。「土産話を楽しみにしてるよ」と姉は文句も言わず、私を送り出してくれた…。

スタンドまで行くと、彼の姿が見える。まだお仕事中だ…。

彼の姿を見た途端、いきなり緊張してきた…。

スタンドの斜迎えに電話BOXがある…。

唯衣に電話してみたけど話し中で、でも誰かの声が欲しくて…電話嫌いな玲夏に電話をかけた。

「志摩ちゃん？どうしたの…？」

「あ、夜にごめんね？…あ、あのさ、いきなりで悪いんだけどさ…。がんばれ…って言うてくれないかな？」

「へ…？」

今にも逃げ出してしまいそうになる気持ちを少しでも勇気付けて欲しくて…。

「うん、いいよ。…志摩ちゃん、頑張つて。」

「ありがとう」…そう言おうとして、泣きそうになった。

告白なんてした事ないから…。緊張で、心臓が痛いほどドキドキし

て…。

『なんかわかんないけど、終わったら電話してね？』

「うん。玲夏、ホントありがとね」

そう言うのと電話を切った。

そして、スタンドを見ると片山くんが私服に着替えていて、帰ろうとしているところだった。

片山くんが店から出て、歩き出した。私も走り出した。

大きな道路を信号無視で横切り片山くんは歩いていく…。

私はその道路を渡りきれないでいた…。

「はやく…青になつてよお…」

やつのことで信号が青に替わり、私は走り出した。

かなり前の方を片山くんが歩いている。

すごい雪で、かすんで片山君を見失いそう…。

「やだよ…そんなのヤダよ…！」

私は力の限り走った。ブーツが走りにくい…。

私が片山君に追いついたのは、片山くんが丁字路を曲がろうとしていた所だった。

「あの…」

声が小さかったのか、振り向いてもらえない…

「あの…っ！」ようやく片山くんが振り返り、私は片山くんに駆け寄った。

片山くんは少し驚いて不思議そうに私を見ていた。

やっと、言える…。もう、言うしかないんだ…。

「あの…ずっと、…ずっと前から好きでした。…付き合ってる人、いますか？」

息せき切って、これだけ言うのが精一杯だった…。

だけど、結果がどうであれ、言えた自分が誇らしかった…。

「……………」言われた片山くんは…困ったように頭を掻いていた…。

言われた片山くんは…困ったように頭を掻いていた…。

「…………困ったな…」

やっぱり困ってる…。困らせるために言ったんじゃないけど…やっぱり迷惑だよな…

「困ったな…君の事、よく知らないし…」

…ごもつともな意見です。私もあなたの事よく知りません…。でも、だから知りたい。知らないから、知りたい。『困らせてごめんなさい。』そう言おうと口を開いた時だった。

「携帯とか…持ってる？」

片山君の口から意外な言葉が出た。

だって、断られると思ってたから…。

でも…私には携帯電話はない

「あ…いえ。」

「じゃあ、家の電話とか…」

「ごめんなさい…。私の家、電話回線引いてなくて…。いつも公衆電話で…」

「あー……。そつか。」

そう言うとおもむろに自分のポケットから携帯電話を取り出し、私に言った。

「今から番号教えるから…書くものとか…持ってる？」

片山くんがくれたラストチャンスよ！私はカバンの中を漁った。

……………ない。

「ない…？」

片山くんは哀れむような悲しげな顔で私を見つめる…。

……………くう…っ！

あきらめてたまるか…！！

「暗記します…！！」

そう言った私の頭から雪が落ちる…。

「すごい雪…。頭とか、肩とか、雪…積もってる…」

片山くんはそう言いながら私に積もってる雪を掃ってくれた…。

私は彼のそういう優しさにグイグイ引きこまれていった…。

「番号は090……」

片山くんはゆつくりと番号を読み上げ、私が覚えるまで何回も教えてくれた。

「……覚えた？」

「はい」

片山くんは優しく笑った。

「俺、正月は昼からずっとバイトで……んー……6日過ぎたら時間空くから、6日以降だったら昼まで寝てるし、いつでもかけてきて。」

……これは、OKだと思ってもいいんだろうか……？

これは、夢なんだろうか……？これは、夢なんだろうか……？

ああ、いかんいかん。余計な事考えると番号忘れちゃうよ……。

「かけてきてくれたらいつでも会いに行くし。」

「……はいっ！」

好きな人にこんな事言われたら……嬉しすぎて泣きたいやら笑いたいやら……

「じゃあ、6日過ぎに……」

そう言つて、片山くんは行ってしまった。

……で？ねえ……これってOKって事なの……？

……あっけなさすぎじゃない……？

悩んでた半年間って一体……？

私は一人片山くんの後ろ姿を眺めながら立ち尽くしていた。

けど、片山君の歩いていった方向って私の家と同じ方向なんだけど……。

ここで一緒に歩いて行つてウザがられても得じゃないしな……片山くん家つて、この辺だったんだ……。意外と近所だったりして……？

舞い上がつて、いろいろな事を考える私だったけど、簡単に手に入る幸せなんて所詮たいしたことないんだって、思い知らされる事になる……

### 第3話 選択肢

「告白したってええ！？うまくいったの？ええええええ！！」

次の日唯衣に電話をし、報告をし、ほどなく唯衣と玲夏が家に来た。  
「志摩ちゃん……よかったねええ！」

「まあ、相手が片山だったのは気に入らないけどね……」

唯衣と片山くんは中学の時の同級生で、仲が悪かったらしいく、私が片山くんを好きな事に唯衣は納得がいてないみたいだ……

「でもさ……片山だったら何人が彼女いてもおかしくないと思ってたんだけどなあ……」まあ、それは私も思った。

「でも私、ちゃんと『彼女いますか？』って聞いたよ」  
「で？『いない』って答えた？」

「……………」  
「ちゃんと聞いたもん……彼女いますか？って……」

「……………」ええっ？

「……………」あれっ？  
「……ちよつと待つてよ……？」

「……………」  
「……………」いない  
「……って言わなかったよなあ……？」

唯衣も私の動揺を目の当たりにしてため息をついた。

「聞かれた事をはぐらかして、携帯番号を教える……か。女に期待を持たせるの得意だね。ひな……ヤバイんじゃないの？……襲われたりして……」

な、なんか、唯衣の言ってるいぢわるが、ただの意地悪に聞こえないんですけど……。

「唯衣……やめなよ、自分がうまく告白できないからって志摩ちゃんに当たるの……」

玲夏の一言は唯衣にとってきつい一撃だ。

さすがの唯衣もこれは効いたらしく、しばらく無言だ…。

そして咳払いを一つ。…気を取り直してから私に忠告する。

「6日以降に電話してって言われて6日に電話しないほうがいいよ。『待ってました!』…って言わんばかりでしょ?…片山つてすぐ調子にのるから…」

餓えてる女と思われるわけね…ガツついてるといつか…。人に言われた通りにするっていうのもシヤクだけど…

6日はおとなしく家に居て、7日になってから片山さんに電話をかけた…。

『おかけになった電話は、電波の届かない場所におられるか、電源が入っていないため・・・』

つながりません…。

その後、毎日毎日、寒い公衆電話で何回かけてもつながらなくて、やっとつながったのは17日の夜だった…

『もしもし…』

「あの…」

『誰?』

電話の向こうの片山くんはなんだか不機嫌そうだった…

「あの、去年の暮れに告白した…」

『……………あー…』

……………あー…???

どういう反応だったら良かったのか自分でもわかんないけど、今の反応はム力つく…。

片山くんは面倒くさそうにこう言った

『なに?』

何、ナニ……………なに?電話をかけて相手に言われて一番ム力つく言葉。『なに』とか、『何か用?』用があるからかけてんじゃん!って…。あー…もう、そんな事言われたらお姉さん…言葉を失ってしまう…。



「え…っ、あ、あの、明日、会えないかなって思っで。」

『明日？…明日はダメだな。』

勇気を振り絞って言った言葉を片山くんはアッサリと却下した…。

「じゃあ！あさっては…」

『あさつてもちよつと…。ごめん…。』

いつならいいのよ！…と、もう少しで声に出そうだった…。

言葉を失った私に片山くんはこう提案した。

『…じゃあ……今から会えない？』

「…今から！？え、でももう遅いし…」

『遅いつつてもまだ7時だけど？』

…私、なんでこんなに警戒してるんだろう？

……………。

唯衣が変な事言うから…

片山くんがすかさず言った。

『…もしかして、警戒してる？』

「えええ？そ、そんな、こ…とは」

声がつわずつて警戒してるのバレバレ…

『会いたい』

さっきの冷たい片山君からは想像もつかない言葉に耳を疑った。

好きな人からこんなことを言われたら…

胸がキュンとなっても仕方ないじゃない…？

「え…っ？」

私はワザと聞き返してみる…。

『イヤなら別に無理にとは言わないけど…』

……………ど、どうする？どうしよう？？

今日を逃したらいつ会えるか分からない…

「いいけど…」

私は言ってしまった。

行動しない後悔の方がつらいって思ったから……………。

『本当！？じゃあ……』

そうして私達は国道沿いにある大きなスーパーの前で待ち合わせる事にした。

私は大急ぎで待ち合わせの場所に向かった……。

私のほうが早く着いた。

…そりゃそうか。急いで来たもんな……。

それから5分後、国道の向こうからタバコをふかしながら歩いてきた……。

ガラ悪う……。

って……

彼、高校生じゃん！メチャメチャ未成年じゃん！！タバコ吸っちゃダメじゃん……？

「待った？」

「いや……そんなに……」

「寒いし、行くトコないから俺ン家、来ない？」

『暗くなってから男の子の家になんて！』って……

考える私は考えすぎ……？

お固いつて思われるかな……？

そういう風に疑ってしまうのはふしだらなこと……？

そういう事しか考えてないって思われるかな……？

私は片山君に頷き、彼の家に行く事にした。

「名前……なんていうの？志摩……」

私は彼が私の苗字だけでも知っていた事に驚いた。あー……。私の姉ちゃんが片山君のバイト先の会員だからか……。

「日向……。しま……。ひなた……。」

「ひな……。か。俺の名前は知ってるよね？」

「片山くん……でしょ？」

「そ、片山……。学……。学でいいよ。」

不安は不安だったけど、好きな人と一緒にいられるのは……

信じられないくらい嬉しいよ。

彼の家は待ち合わせの場所から結構距離があったけど、私にとっては短く感じた。

「お邪魔します・・・」

居間に入ると彼のお父さんがいた。それでちょっと安心した。考えすぎだよな・・・。

階段をのぼって、彼の部屋に通された。

結構・・・いや、かなり・・・散らかってる・・・。まあ、男の子だし・・・

「かなり・・・散らかってるけど・・・。一応片付けてから出てきたんだけどね・・・」

一応、言い訳はしてみるわけね・・・。

「そこら辺、適当に座ってて・・・って言ってもマトモに座れる場所ベツドしかないんだけどね。」

「あ、コート貸して。掛けるから・・・」

掛けるから・・・」

私は彼にコートを手渡し、彼は丁寧にハンガーにかけてくれた。

・・・一応ね、足の踏み場はあるんだけど・・・

ゆかは座れる場所じゃないもんね・・・。

仕方ないからベッドに腰かける事にした。

彼は距離を開けて私の横に座った。

静まり返った部屋は会話もなく、音楽もなく・・・なんだか・・・すごく居心地が悪い・・・彼を直視できない・・・

そんな沈黙の中、片山くんが口を開いた。

「今まで付き合った事とか・・・ある？」

「な、ないよ・・・？そんな事今まで興味なかったし・・・」

私は即答した。

その後また沈黙・・・。

二言三言余計だったかなあ・・・？

やだなあ・・・沈黙ってキライ・・・。

私はふと横目で片山くんを盗み見た。

「……………」

え…なんか。近付いてきてない…？

人一人分くらい開いていた私達の距離は少しずつ近づいてきてる…？

こ、これって……

ヤバくない？？？

いくらそういう事に疎い私でもこの雰囲気は明らかにやばいよ…  
どうしよう…

そ、そうだ！帰っちゃおう！

これ以上変な雰囲気になったら困るぞ…！  
再び、彼が聞いてくる…。

「エッチとかした事ある…？」

「……」

好きな人の口から聞くその言葉に私は身を固くした…。

え…ちょ、ちよつと待って…？？？

腰の辺りに明らかに私のじゃない手がある…。

彼が私の腰に手を回して、しっかり服をつかんでる…？？

そしてとどめの一言を彼は私の耳元でささやいた。

「エッチしよつか…」

「……………」

気絶寸前大パニック…

私は必死に首を横に振る。

体中の血が全部頭に集中してるんじゃないかって位に激しいめまい。  
どう返せばいい？彼に嫌われずにうまく断る方法は…？？

パニックな頭でそんな事を考えても答えは出てきてくれない…。  
うるたえてるうちに彼は私をゆっくりとベッドに横たえた…。

その途端、もうどうでもいいかなあ…って思えてきた。

抵抗しても、惚れた私は彼から逃げられない…。だったら…。

流された方が楽なのかな……………？

私がゆっくり目をつぶると、唇に感じた事のない感触…。

初めてのキスだった。

好きで、好きでしようがなかった人とキスしてる…。

学は丁寧にキスを繰り返していく…。

嬉しい…半分はそう思ってるのに…

なんだか虚しいよ…。どうしてなのかな？好きで仕方ないはずなのに…

キスをすればするほど、心の中が空っぽになっちゃう感じ…。

彼の気持ちが流れてきてるのかな…？

そうだよ……………。

どうして、好きでもない私と、平気でキスできるの…？

その先まで進もうとしてるの？

彼を突っぱねて逃げる事だって出来るかもしれない。

でも、絶対後悔する…。

じゃあ、このまま流されれば後悔しないの…？愛のないこの行為がこの先何になるっていうの…？？

私は答えの出ない自問自答を繰り返していた。

短い時間で重要な選択を迫られてる気がした…。

彼が、私のシャツのボタンに手をかけたとき、ほんの少しの理性が勝った。

「い…やつ…！」

私は彼を跳ね除けた…。一瞬空気が固まる。

「あ、あたしっ…帰る…！」

私は逃げるように部屋から出ようとすると、何事もなかったように学が声を発した。「コート！コート忘れてる！」

彼はハンガーから私のコートを外そうとしてくれていたみたいだったけど、その余裕さも、私にはなんだかショックだった…。

私は彼からコートを奪うようにして受け取ると、逃げるように部屋から出た。

階段を駆け下りると学のお父さんと目が合う。

私は出来るだけ平静を装って学のお父さんに挨拶をし、家から出た。雪が降り注ぐ寒さも気持ちよく感じた。

自分の気持ちを落ち着けるのに丁度いい温度だった。

振り返り、学の家を見つめ、恋が終わったんだな……って自覚した。私が自分で終わらせてしまったんだなって……

でも、涙は出なかった……。それが余計に、苦しかった……

## 第4話 バイト先の風景

「ほらね？片山は信用できないんだってば！…ひなもわかったですよ？」

…分かった時にはもう遅かったんだってば…

あれから一週間経って、ようやく一応、気持ちの整理がついて、唯衣に報告（？）

唯衣といえば、失恋した私を気遣うのもそっちのけで、私に先を越されたのを悔しがっていた…。

「キスってどんな感じ？気持ちよかった？」

「……………」言われて学の唇の感触が蘇ってきた…

気持ち良くなかったと言えばウソになる。

だけど、気持ちが空っぽのキスがなんになるって言うんだ…。

私は学への気持ちを振り切るようにバイトに打ち込んだ。風邪をひいて朦朧としてもバイトを休もうとは思わなかった。

「もう、バイトの時間だ…用意しないと…」

私がバイトに打ち込む分唯衣と遊ぶ時間が削られ、唯衣は不服そうだった…。

その日出勤したら、今日から入った新人だという男の人がいた。

私、スーパールのレジ店員をやっています。

今日は、夕方4時から8時までの4時間勤務。

「今日は志摩さんに指導してもらってください。」

…と、新人を押し付けられた…。

『櫻井』と名札がついている彼は、物覚えが良く手間がかからない人。第一印象はそんなに悪くはなかった…

午後8時、私と彼はバイトが終わり更衣室で着替えを済ました直後ドアがノックされて私は振り返った。

ゆつくりとドアを開けて様子を伺いながら正社員の小原さんが入っ

てくる。

小原さんは私のレジ指導をしてくれた人。

「志摩さん…明日から1週間、昼に出勤してくれないかな?…ダメ?」

私は学校にも行っていないし、昼間のバイトもしてないから断る理由なんてなかった。

私が更衣室から出るのを待っていたかのように新人の彼、櫻井くんが立っていた。

「お疲れ様でした」

なんとも人懐っこい男だ。

今まで接した男の人では珍しいタイプの人だったので多少、面喰らった。

「家の方向同じなら一緒に帰りませんか?」

って言うから家の近くまで来たらハイさよならかと思ったら、家までついて来て、喋りのエンジンに火がついたように喋りまくる櫻井くん…。体調が万全ではなので、早く家に入りたんだけど…

…季節は春…夜ともなると寒い…。しかも風邪引いてるし…。私はなんとか話を終わりに持っていこうと努力した。

「志摩さん…?顔赤いですよ…。」

ようやく櫻井くんが私の様子に気付いた。

「家、出る前から体調悪かったんだよね…。頭痛いし。」

私がそう言つと櫻井くんは私の額に手を当ててきた…。

実は私、顔に触れられるのにめっぽう弱い。惚れスイッチがあるのか?…つてくらい…

しかも今は失恋直後、しかも風邪で弱ってる…。ダメだダメだダメだ!

片山学の事でよおつくわかった!

…恋愛すると私はダメになる。

私は櫻井くんの素早く振りほどいた。

櫻井くんは私の顔を覗き込んだ。



「志摩さん今日は早く寝た方がいいですよ？すごい熱だし…」

熱で朦朧としているのか、惚れスイッチ触られて動揺してるのか、  
く手を振ると逃げるようにして家に入った。

私… ドキドキしてる…？なんか、ヤダ…。

恋してしまいそうな自分がすごくヤダ。

学的时候はそんな事考えなかったのに…

考える間のなく好きになっただけなのに…。

なんでかな…？

考えないようにしてるのに、気を抜くとすぐ、学の事考えてる…。

考えないように意識してるって事は、考えてるのと同じ事で…。私  
…まだ……？

私が昼間のヘルプをするようになって二日目の事だった…

櫻井くんが家に来た。

「志摩さんとシフト合わないから、志摩さんの顔が見たくなって…。

」

言われた瞬間、鳥肌が立った…。

あれ…？

なんで鳥肌……？？

普通こんな事言われたら嬉しいんじゃないの？

なんで鳥肌…？

もしかして、惚れスイッチに触れられて動揺したのも、ドキドキし  
たのも…恋の予兆なんかじゃなくて…

ただの拒否反応？「僕、1日でも志摩さんの顔見られないと…志摩  
さんの事ばかり考えちゃって…」

うん…決定的だね…。ダメだ、私。

顔は確かにかっこいいんだけど、マメっていうか…マメすぎて…  
こわい。

こわい…っていうか、キモい？

個人差はあるにしても…私はこの人ダメかも…。

いい人なんだけど…。

…そう！『いい人』なだけなのよ！

気難しい私にはこの位マメな人のほうがいい気もするけど、…私は  
学みたいに何を考えてるのか分からない人のほうが…好きだ…

「……志摩さん？」心ここにあらずの私に気付いたのか櫻井くんは  
顔を覗き込んできた。

「あ、ねえ、櫻井くんって彼女いないの？友達紹介してあげようか  
??」

…よく考えたら、失礼な発言だよな…『女だったら誰でもいいんで  
しょ?』的な…。

「いや…。紹介とかは…『彼女』が欲しいだけってわけじゃないか  
ら…。」

力なくそう答える櫻井くん。

う…。傷つけた。

「ごっつ、ごめんなさい…。」

私の謝罪に顔をあげ、力を振り絞ってこう言い出す…

「僕は…僕は志摩さんが」ダメ~~~~~!!

お願いだからそこから先は言わないで…ええ!!

「わた、私ね、元彼にまだ未練タラタラで…どうしても彼じゃなき  
やダメで！櫻井くんは友達としては最高だけど…」

何が元彼だよ…1日しか持たなかったくせに…

って突っ込みを入れながら、自分でも信じられないくらい早口で捲  
くし立てた。

これで、櫻井くんが私の事口説いてるのが勘違いだったら、私はと  
んだ笑い種だな…と思いながら…

「そ…そう…ですか。僕の事は考えてもらえないと…？友達…」  
勘違いではなかったみたいだけど…。

もし、彼の立場だったらどんなに辛いだろう…？

告白もさせてもらえないで失恋…って。もし、自分がそうになったら…  
そう思ったら謝らずにはいられなくなつた。

「ご…ごめんなさい…」

「謝らないでください…」

彼は私に心配かけまいと明るく振舞い力なく去って行つた…。

私は罪悪感に苛まれながらも自分の気持ちを再認識した。

今更、どうすることもできない相手に…。まだ、未練タラタラなんだと言つ事を。

最近、よく思ふ事がある…。

勝手だなあ…と。

わがままって言つたほうがいいのかも知れないけど…

もちろん、私の事。自分勝手な気持ちで相手を傷つけて…。

私は、先日の櫻井くんとやり取りを深く反省していた…。それだけじゃない、学の事を忘れられないなんて自分勝手にもほどがある。なんでこんな事考えてるのかな…？

私のバイト先は小さなスーパー。

レジは3台あって、前から1番レジ、2番レジ、3番レジ。夜8時を過ぎると人が空いてくるので、3番レジを8時に閉めます。

3番レジについてる人も8時でバイト終了です。

で、私、その3番レジにいる…。

今日は開店から夜8時まで勤務する事になってます。この店シフト減茶苦茶…。

私の場合、無茶が利くから特別なんだろうけど…。

この、3番レジ…タバコの棚が後ろにあつて結構狭い。

3番レジにいる人は7時35分くらいにタバコの棚にタバコを補充します。

タバコなんて吸わないし（吸ったらいけない歳だし）、銘柄なんて未だに覚えきれない……

私がタバコの補充に悪戦苦闘していると背後に気配を感じて振り向いた。

私は息を飲み込んだ。

「……………」そこにいたのはガソリンスタンドの制服姿の片山学。向こうも一瞬驚いた表情を見せたが、一言。

「タバコ。マルボロ」

「ま、マルボロ……?」

名前と箱が一致しないで棚にウロウロ指を指す。

「右の……あ、下の……」と、学がナビしている。

……って、

「未成年にタバコ売っちゃだめ！」

って言われてたよな……。

「それ！」

「これ……………」

学は頷き、私にお金を手渡し、私からタバコをさらって去っていった……。

「……………」

あれ……?忘れてた。

この店の隣に学のバイト先があるんだということをスッカリ……。

なんで今まで気付かなかったのか、なんで今になって鉢合わせたのか不思議だったけど……

超特売!!

これは、2ヶ月に1回、1週間に渡って特売を行うウチの店名物(?)イベント。

しかも、今日は日曜。超特売最終日。

店内は異常なまでに混み、レジが3台しかない事を恨めしく思った。レジには長蛇の列、笑顔がひきつる…。

なんとか客足が落ち着きだしたのは夕方4時過ぎになってからだ。つた。

私はふと、1番レジに並んでいるお客さんに目やった。

学が彼女と仲良く買い物…という風景。

それには全然驚かなかったし、ショックでもなかった。

だって、彼女がいるんだろーなー…ってなんとなく、わかってた事だったし。

でも…ショックだったのは…その彼女が私の知っているひとだったから。

ああ…考えてみれば、彼女の家は私の家の近所だったな…。そっか…私は彼女の家に向かう学を呼び止めて告白したのか…。

そっか、なんだ…そういう事が…。

小さい頃、よく遊んでくれて、面倒見てもらった。

優しくて、可愛くて、大好きだった。

憧れだった、大好きだった…福井美咲さんが学の彼女だったんだね…。

憧れていた人が好きな人彼女…。憧れって言っても昔のことで、今は何の関わりもない人なのに、自分がなんでこんなにショックを受けているのかわからない。

自分に望みなんて1つも無い恋、自分で投げ出したのに…。

いや、投げ出す前から…。

すでに告白の時点から望みなんてなかったんだ…。

この恋で幸せになれる選択肢なんてすでになかったんだ…。

私はマヌケな自分にショックを受けていたんだ…。舞い上がって、傷ついて、一喜一憂していたバカな女…。

それとも悔しいのかな…？…まだ学を好きな自分を。

自分が情けなくて、惨めで消えてしまいたい！！

そんな気持ちのまま休憩時間になった。

私は休憩室で一人になってひとしきり泣いた。

泣いて泣いて泣き疲れたら気持ちが落ち着いてきた…。

これ以上好きでいてもしかたない…。男なんて他にいくらでもいるしさ…。

……そもそも私は恋に無関心だったんだっけ。恋なんてしなくても生きていけるって思ってた生きていた。

実際、恋をして私はダメになった。

くだらない事で思い悩むようになった。自分勝手にワガママな物の考えをするようになったのも恋をしてからじゃないか…？

学をあきらめるしかないんだ…

私は自分に言い聞かせていた。

男なら誰でもいいというなら櫻井くんに逃げ込む選択肢もあるだろうけど…

彼に対しての拒否反応が更に強まる出来事があった…。

彼は私のバイトが休みの日は自転車で私の家の周囲をうろつき、私が出たまでそれを続けた…。

家の窓からその行動を初めて見たときは恐怖を感じた…。

そして私を見つけると彼は決まってる言っただ…

「志摩さん！偶然ですね！」と…。

偶然じゃないのは明白だし、近所の人も気味悪がって『ひなちゃん気をつけなさいよ？』って心配されるし、姉ちゃんからも『あいつ近所迷惑だからなんとかしてよ！』って怒られるし…。

なんとかしろったってえ…どうすりゃいいのか…。いやいや、まいったよ…。

まさか私がスーカー被害(?)に遭おうとは…

私もバイトの休みの日はバイトの事を忘れてゆつくりしたいもん。櫻井くん、悪気がないのはモチロン知ってるけど…。

「困るの！」真剣に懇願する私に対し、櫻井くのとぼけること、とぼけること…。

「へ？なんの事ですか？」

終いには逆ギレをされる始末…。

「じゃあどうやってバイトに行けって言うんですか！」「ウチの前通らなくても道なんていくらでもある。そんな言い訳通用しない！

「…警察…呼ぶよ？近所の人も気味悪がつてるし…」

私のこの一言に彼は恐れおののいた…。

その後の切り替えの速さは実に見事なものだった。

友達を紹介すると言う話、散々聞き入れなかったのに、急に紹介しろと言いだした。

玲夏が

「彼氏が欲しい！紹介して！」待ち合わせのセッティングをしてあげた…。

その後、バイト中の私の元に二人で現れて、幸せそう二人仲良くに帰って行った…。後日、玲夏に

「友達の紹介だからって、遠慮しないでいいんだよ？断りたかったら断りなって！」

…と言ってみたところ、玲夏は不思議そうな顔をして、

「え…？バツチリ好み！」

だそうです…。

私も唯衣も今まで玲夏の好みなど知らなかったのですが、…蓼食う虫も好き好き…

好みは人それぞれなんだなあ…と思った瞬間なのでした。

## 第5話    マイペースな男

目の前にバイト先が見える…。

私とバイト先を隔てる大きな道路…。

もう随分待つてる気がするなあ…信号。

「ねえ」

すぐそばで声が聞こえた。私は声のした方を向く。

そこには制服姿の男の子が立っていた。金髪に近い茶髪、制服は着崩し、軽〜い印象。

スラッ和高い背に整った顔…。

ホント…キレイな男の子だなあ…。

私に声をかけたわけじゃないだろうと思って、周囲を見回したけど、私以外に人は誰もいなかった…。

「どっか行かない？」

見た目どおり、軽い感じで軽い事を言ってきた…。

生まれて初めてされたよ…ナンパ。これがナンパ…なのか…??

「いえ、これからバイトなんで行けません。」

我ながらハッキリ断ったつもりなんだけど…。

「じゃあ、バイト終わってからならOK？」

「……………OKなわけないっての！」

私、唯衣からよく

「断り下手」って怒られてたよなあ…

「バイト終わるの遅いんで、行きません！」

これなら大丈夫か？

彼は少しの間だけ黙り込み、不服そうに言った。

「……………バイトってどこよ？」

「言っ必要ないし！」

そんな会話をしているうちに歩行者用の信号が青に替わった。



私は大慌てでその変な男から逃げるように店に入った。

その日のレジも忙しく、出勤前の事なんてすっかり忘れていった。  
時刻は8時休憩の時間だ…。

休憩時間は15分。1番レジの人と2番レジの人が交代で休憩をとる。

その間、レジは一人だけになる。

混まない時間だから一人でも大丈夫。

「右京くん。8時だよ休憩すれば？」

右京洋和：3週間前に入ってきた新人。

科は違うけど櫻井と同じ学校の生徒なんだって。

悪っぽく見えるんだけど、穏やかな物言いと、かわいらしい顔がそれをカバーしている。ただ、身長が低いのを本人は気にしているが普通にモテると思う。

右京くんはニコツと笑って会釈して

「じゃあ、休憩行ってきます。混みだしたら呼んでください」

混むわけ…ないと思うけどね…。

私は笑顔で返すと、右京くんは休憩室へ消えた…。

「ヒ・マだあ…お客さん来ないかなあ…」

そんな時、店の入り口の自動ドアが開いた。

変な人が来た。さっきの変なナンパ男。

「こんばんわ」

「…………。いらつしゃいませえ…」

ハイテンションな男に反してもものすごくブルーな私…。ニコニコしながら私の事を見つめているだけの彼。

「…………。あの…………なにか？」

私は客か何なのか分からない男に露骨な態度に出た。

「なにか？…って客だよ客」

「商品を持たずレジに来られても困るんですが…？」

男は私のネームプレートをまじまじと見た。

「志摩さん…か。下の名前は？」

「言う必要ありません」

私は過剰にイラついていた…。

櫻井によやく彼女ができて解放されたというのに、そんな私の事などお構いナシにこの男は私を舐めるように見ていた。

かつこいいのは外見だけ……って男、最近増えたな…。

「…………ふーん？細いのに結構胸あんだね」

「……！」

私、このテの会話すごく苦手。

……っていうか、初対面の相手にいきなり失礼でしょ？？

初対面じゃなくても失礼だと思うけどさ…

「お、新鮮な反応」

この男は私の反応を見て楽しんでる…。

頼む、もう、帰ってくれ…。

「アナタ、そんなに女に餓えてるようにも見えないけど……？街に出てナンパしなよ。いくらでも女の子がついて来るでしょ？？」

男はまだ、ニコニコしながら私を見ている。

「ナンパした女のバイト先まで押しかけるのがアナタのやりかたなの？？そんな事されたって私は迷惑です。……帰ってくれませんか？」  
男は感心したように頷きながら帰ろうとした。

そして立ち止まりこう言った。

「俺、恩田」

その場で振り返りもう一度言った。

「……恩田牧だから。覚えといて」

「は！？なんで私がアナタの名前覚えてないといけないの？」  
率直な意見だった。

「俺とあんた、これから長い付き合いになりそうだから……さ」

そう言っただけで恩田という男は帰っていった…。

「ワケわかんない……」

なんだか……すごく疲れた…。

塩でも撒きたい気分だっ。

覚えといて？長い付き合いになりそう…だ？…？

櫻井のしぶとさにあつかましさをプラスしたような男…。

まあ、櫻井のような真剣さがない分、まだ楽だけど…

そのうち飽きて来なくなるというけど…。

そのうち休憩を終えた右京くんが戻ってきた。

「休憩終わりました。…志摩さん顔色悪いよ？…なんかあったの？  
忙しかった？」

疲れが顔に出てるのか…。

「いや、なんでもないよ。暇だったし！じゃ、休憩いただきます」  
その後は平和（？）な時間を過ごせた。

閉店して、店内で仕事して、帰るのはいつも大体10時半ぐらいになる。

店の裏口から出て、右京くんと二人、話しながら駐輪場まで歩く。

「へー右京くんバイク乗って来てんだ！かつこいいー！」

「志摩さんバイク好き？後ろ乗ってみる？」

「ホント？いいの??」

…などと言う他愛もない会話をしていた。

そうしてるうちに駐輪場に着いた。

「今度バイト一緒になる時、歩いておいでよ。送ってくからさ」

バイクの後ろに乗ってみたいと思ってたので右京くんの申し出に嬉々として飛びつく私。

「え？マジで？…ホントにいいの??私、ホントに歩いて来ちゃうよ？」

「うん、全然OKだよ」

…と、そこで私の表情が固まった。

暗くて全然気が付かなかったんだけどさ……。この暗い駐輪場に…。

…誰がいる！…！

「！…！」

暗闇から声がする…。

「いや、まいったよ。待つのはいいんだけど、どれがあんたのチャリかわかんなくてさ…」

私は怯えた。…本気で怯えた。

いくら櫻井でもここまでしなかったから……。恩田は私のもとに歩いてくる……。

私はゆるりと後ずさりをし、少しずつ、ホントに少しずつ右京くんの後ろに逃げ込んだ。

その様子に右京くんも察し、一歩前に出る。

「……俺が用なのはキミじゃなくて志摩さんなんだよね。ど・い・て」

馬鹿にしたように力の抜けた声で話す恩田に対し、

「その、志摩さんが嫌がつてんだよ」

普段の穏やかな口調とは違い、荒々しい口調で右京くんは言い放った。

恩田は突然右京くんの頭を撫でようとして…私の頭を撫でた。

右京くん越しに…

「キミつてちっちゃいんだね…。いくら志摩さんの前に立つてもキミ越しに日向に触れちゃったよ？」

あ、それ禁句でしょ…。身体的なところを突くのは汚いよ…。

私は恐る恐る右京くんの顔色を窺った…。

眼鏡の奥の目がガラガラ殺気立っている…。そりゃそうだよ…。

「…ざけんなゴルァ!!」

右京くんは素早く、力強く恩田の胸ぐらを掴んだ。

あわわわわわ…。

普段おとなしい子が怒ると怖いつてホントだな…。

私はパニックでその後の事は覚えていない…。

多分、恩田が持ち前のペースで右京くんをなだめたんだと思う…。

私、最近思っんだ。

生きてる人間の方が幽霊より何倍も怖い……と。

いろんな意味でね…

バイトに没頭する日々はまだ続いている…。

9時10分……

もうすぐ、現れる時間だ…。

私はヤツを待ちわびてる……??

入り口の自動ドアが開く音がすると私の胸はドクンと音を立てた。

…ヤツが来た。

ガソリンスタンドの制服に身を包み、一万円札数枚を手にしている片山学が…。

私はすぐさまレジから逃走し、商品棚の商品を整頓する仕事を始めた…。

この作業を『品出し』…という。レジを見ると櫻井が千円札の束を数えていて、学がそれを待っていた。

ガソリンスタンドでは万札を出すお客さんが多いらしく、千円札が不足するらしい…だからウチの店に数万円分の千円札を両替しに来るんだ…。

両替に来る店員は日によって違うけど、圧倒的に学が来る事が多い。私は賞味期限をチェックしながら、お客さんが取りやすいように商品を並べる。

作業を終え、レジに戻ると櫻井が不服そうに私を見る。

「何よう？」

「なんで志摩さんが相手しないんですかあ？」

櫻井は私が学の事を好きなことをなぜか知っていた。

でも、あきらめようとしてる事までは知らないみたいだ。

「…相手ってなによ？ただの両替でしょあ？誰がやったっていつしよじゃん」

「じゃあ品出しだって誰がやっても一緒じゃないですか！」

こいつ……

彼女が出来た途端態度でかくね????

…いや、別にいいんだけどさ、猫…かぶってたんだなあ。って思ってたさ。恋愛で猫かぶるのは女だけじゃないんだな…と。

「ハイハイ。今度からちゃんと両替もしますよ。…っていうか私やつてんじゃない、両替。」

「あの人じゃない店員の時は…ね。照れ隠しにしては露骨過ぎますよ！」

言いながら怒っている櫻井。

私が学を避けてるのは露骨な照れ隠しだと思っていろいろ…。これ以上この話を長引かせたくなかったので違う話を振ってみる。

「…あんた玲夏とうまくいってないの?」「順風満帆ツスよ!」

自分の恋愛話になると急に上機嫌になる…。ああ、こいつがバカでよかった。

その後5分櫻井は玲夏がいかにかわいくて、優しいかを延々と話し続け、自分のレジを閉めるまでずっと上機嫌だった。

9時35分。1番レジ、レジ締め。

もう混む心配はないけど、お客さんは来るので2番レジは店の玄関の鍵を閉めて、お客さんがもう来ない状態になってからレジを締める。私がレジ締めをしている間、1番レジの人間はモップで床掃除。床掃除が終わったら先に帰ってもいいんだけど、先に帰ったヤツはまだいない。

2番レジもレジ締め終了して、やっと帰れる…。

店の裏口から出て、駐輪場に向かった。

「今日も玲夏に会いに行くんですよ!」

「あー…そうかいそうかい」

とりあえず玲夏を大事にしているのがわかって安心したよ…。玲夏も「毎日会いに来てくれるんだ」「…って、嬉しそうに話してたし…。この二人はしばらく安泰だな…。

そう思いながら駐輪場に行くと、ああ…やっぱりいた。

「よお!」

『よお!』…じゃ…ないよ…

櫻井は不思議そうに恩田を見、私に訊ねる

「知り合いですか？」

私はどんよりと言った。

「うつん、こんなひと知らない」

恩田はおどけながら私に言った。

「そりやないんじゃない？ ひなたちゃん」

「…んな！？」

教えたはずのない下の名前を馴れ馴れしく呼ばれ動揺した。

「ああ…知り合いと待ち合わせしてたんですか、…じゃあ僕はこれから玲夏の所に行くんで。じゃあ！」

櫻井は勝手に自分なりの解釈をして大急ぎで嬉しそうに自転車をこいで行つた…。

薄情者…。

「あ…行っちゃったねえ…。今日は簡単でよかったわ」嬉しそうに恩田は言った。

なんか…。バイトは楽しいのに、バイト…辞めたくなってきた…。

「ね、もういい加減にしてくれない…？なんでこんな事すんの？キミ、モテそうな顔してるし、その気になればいくらでも…」

私がそこまで言つと、彼は真面目な顔をした。

「もう飽きた。…なびかない女を手に入りたい。」

う…わ…つ、…今時そんな事言うヤツいるか！？

私の事など、お構いナシに恩田は話を続ける。

「今まで付き合ってきた女はどれもアホばつかだ。どいつも…こいつも…」

「私だってアホだよ。…恋愛に関してはみんなアホになるもんなんじゃないの？」

意見する私を一瞥してどこか遠くを見つめた。

「片山は？…あいつはうまく立ち回ってるじゃないか…フン…あいつはアホになるほどマジな恋愛してないからかも知れないけどな…」

「……！」

いきなり学の名前を出され驚いたけど、そういえば初めてこいつに会った時、制服着てたっけ……？学の家にも同じ制服があったな……同級生なのか？

……いや、違う！

こいつが学を知ってるなんて学校が同じなら当たり前だし……。そんな事で驚いたんじゃない……

私が学を知ってる事を、なんでこいつが知ってる……？

「……なんなの？あんた……？怖いよ……」

「あんたのバイト先に俺の友達がいて、そいつに聞いた。」

「……」

思い当たるフシがなくもなかった……。

私の休憩中、3番レジにいた宮元佳織が帰り支度をしていた。私、ちよつと苦手……。それは彼女も同じだろう。私達は必要最低限の話しかしなかった。仲が悪い……とか、そんなんじゃないくて。

……それが、急に彼女から話しかけてきた事が一度だけあった。

「志摩さんて彼氏とか、いる？」

彼女から話しかけてきたこと自体ビックリしたのに彼女の口から仕事とは関係ない話が出てくるなんて思ってたから……

「へ！？いないよ？」

「紹介して欲しいって言ってる友達がいるんだけどさ、会ってみない？」

一瞬だけ、学の顔がちらついた。それを察したかのように彼女は

「好きな人、いる？」

「あああ！違うの！その人、彼女いるし、あきらめなきゃって……でも、まだなんていうか忘れる事に専念するのに必死っていうか」

私は一人で動揺し、必死に弁解していた。

「その人ってさ……片山？」

彼女の口から彼の名が出て パニック＋パニック＝冷静 になって



…。

「あたし、クラス違うけど友達だよ。協力してあげようか？」

「あの…、誰がそんなこと？」

「ん…？志摩さんが片山の事、好きなのを？…櫻井が得意げに話してたよ」

じゃあなんで櫻井とそんな話を…？

…って聞こうと思ったけど…もう疲れた…。

「彼女がいるって事はあきらめる理由にはならないと思うよ…？あいつ彼女『何人も』いるし…」

…って会話がこの男に筒抜けだったって事が…。ウカツ…。この男、何を企んでいるんだろう…？

これから先自分がどうなるのか例えようのない不安に押しつぶされそうだった…。

## 第6話 不信

「志摩さん？」

人に呼び止められる事にさえも、私は怯えていた。

恩田の

「なびかない女だから手に入れたい」

という話なんて信じられない。

恩田が私にまわりつく本当の理由がわからないうちは…私は安らげない。

唯衣も自分の学校で忙しいみたいだし、玲夏も…

他の友達も彼氏とラブラブだったり、バス乗り継ぎする程遠くに住んでたり…

だから、誰にも相談できずにいた。

「大丈夫？」右京くんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「あ…。うん、大丈夫」

全然大丈夫なんかじゃなかった。

…ただ、右京ちゃんとバイトが一緒の日は安心できた。

恩田があっさり身を引いてくれるから…。

「右京くん今日はバイクじゃなかったんだよね？私自転車で来たから。」

「俺？今日は自転車…だけど送ってくよ。」

そう、最近右京くんは家のすぐそばまで送ってくれている。

「…まだ、あいつ、つきまとうてくる？警察、通報した方がいいんじゃない？」

…警察、そんな方法をすっかり忘れていた。

「右京くん…いつもありがとね？そっか…警察かあ…その手があったかあ…」

「あの、さ。『くん』付けやめてくれる？…なんかさ…ガラじゃな

いし。右京でいいよ」

「あ…そう？うん。わかった！気をつけてみるね」

人間不信の中、右京だけは少しだけ信じられた。

その帰り、いつものように恩田は駐輪場で待ち伏せしてて、右京を見るなり

「なんだ今日はおめえかよ…。あのアホじゃなかったんだな…めんどくせ」

アホ 櫻井…

まあ…否定はしないけど…

右京は何も言わずに恩田を凝視している…。そしてなにを思ったのか……………

「おれたち、つきあってるんだ！」

……………とんでもないことを口走った。

「……………」

「……………」

バレバレのウソに私が一番驚いたかも知れない…

「ブツ…」こらえきれずに恩田が吹き出す

「嘘なら嘘で、もっとまともなウソつけよチビスケ！なーにが付き合ってるだ。」

そりゃ…いかにバレバレの大嘘で、笑えるかもしれない…。

でも、なにもそこまでバカにする事ないじゃない！

右京は右京なりに私を助ける方法考えてくれてるんだから…その気持ち少し嬉しいもん！！！！

なんだか悔しくなった…。ムキになりたくなった。

「本当だもん！私達、付き合う事にしたんだもん」

右京のウソに乗ってみる事にした…。

悪ノリじゃない、至って真剣だった…。

付き合ってもいいかもってちょっと思っちゃってる…

もちろん、右京さえよければ…ね。

「おいおい、ひなた、何悪ノリしてんだよ……?」  
くう……端正な顔を歪ませて大笑いしてやがる……。

やがて笑いつかれたのか笑うのをやめ、一息ついてこう言い出した。  
「わかった。……いいよ。信じてやっても。諦めてやるよ」

え、マジで!?

「二人のラブラブのチュー見せてよ。そしたら日向の事諦めるよ」  
何の脈絡もない事を言い出す恩田に私は真面目にうろたえた。

「な、う、えええ!?!」

「ひなた、なんでそんなにうろたえてるんだ?」

恩田は意地悪く笑った。おまえが変な事を言うからだろっ!!  
右京は固まっている……。

「だって! 私達まだ付き合ってたばっかだし……」

われながらナイスな言い訳である。

「おお……じゃあ、なおさらいいじゃん二人のファーストキスの立  
会人になってやるよ!」

ウソだとわかって尚、キスを煽るこの意地の悪さは……

「……ったく、キスキスって、うっさいな……」

どこかで声がする……。ここにいる3人のものではない声……  
よく見ると人影が近づいてきた。……女子高生……?

彼女が私達のところまで歩いてきた。手には携帯電話。

「おまたせ!。ごめんごめん電話が長引いちゃって……」  
いや、待ってませんが……。

……っというか誰?

「あ……!! あなたが志摩ちゃんね?」

私を見るなり人懐っこく話しかけてきた。  
そして私の体を舐めるように見回した。

「……ふん」

なんだっけ……? 前にもこんな事があったような……  
彼女はサラリと言った。

「56点」

……は！？

……スタイル？？そ、それとも顔か？どっちも微妙な点数……

「胸がな……ま、あたしも人の事言えないけど……。学はペチャパイの方が好きなんだよねー」

体をジロジロ見られ、点数までつけられ……。

56点……て……自信あつたのに……って違うわっ！

「あー、あたし、森繁麻美でっす。よろしくね！」

よ、よろしく……？

彼女は構わず続ける。

「あ、眼鏡の彼はもう帰っていいよ。あたしは志摩ちゃんに用があるだけなの」

右京はきよんととして、私の様子を窺っている……。

恩田と二人きりなら怖いけど、この子がいるなら大丈夫……かな……？  
いつまでも右京をこんな事につきあわせても悪いし……

「右京……。帰って、いいよ。ごめんね」

「大丈夫？」

私と右京の会話に入ってくる麻美さん……。

「大丈夫、大丈夫！あたしが何かすると思ってるの？もう、ホラ、ほら！帰った帰った！」

麻美さんは右京が帰るまで『ホラ、ほら！』と威嚇（？）していた。  
そして右京が帰るのを見届けると私に向き直り笑った。

「……ふう……。さ、邪魔者はいなくなった事だし、お話しよ！」

『お話しよ』……って言われても……

アナタが何物なのか私にはさっぱり……。

戸惑ってる私に苦笑気味で恩田は言う。

「俺の元力ノ。……んで学の彼女。俺の事フツて学に乗り換えたの」

「え？え？？？」

学の彼女は福井さんで……。

んで、この人が学の彼女で？？？？

んんっ？？？

混乱している私を恩田は呆れた顔で見て、言った。

「だーかーらー、言っただろ？あいつには何人も女がいるんだってば！」

……。分らない事が多すぎて…何をどう言ったらいいのか…

「まだ信用してねーって感じだな。おまえいい加減にしろよ？」

「百歩譲って、麻美…さんが学の彼女だったとして、それがどうかしたの？私に何の関係もない事でしょ？」

聞きたい事はまだまだ止まらない…。

「そもそも恩田君はなんで私に付きまとうの？？目的は何！？学の事あきらめさせたいの？させたくないの？どっちよ！？」

モヤモヤをぶちまけてちよつと、スツキリした…

「まあ、どうでもいいけど、俺の事は『牧』って呼び捨てにしてくれていいから」

「あたしも！『麻美』って呼んで！」

どうでもいいって何よ！？人の話を受け流して、自分の言いたい事はつか…。

今日までの私のストレスそっちのけで『呼び捨てでいいよ』だ…

…???

「ほ、ほら、牧！志摩ちゃんが殺気立ってるよぉー……」

「待て、焦るなって！じっくり順を追って話すから…。」

二人で私をなんとかだめ、私を落ち着かせたところで牧はゆっくりと話し始めた……

今までの行動の意味や、私が不審に思ってた事全部…。

まあ、それが全部信用できるかどうかは別として…。

「俺、さ…結構前からあんたの事知ってたんだ。」

「いつから？」

「あんたが昼間バイトしてた時から」

昼間のバイト…？今の店のレジ訓練期間の時だろうか？

「1年くらい前だったかな？『見習い』って名札つけてレジやってた時から」

あー…やっぱり…。レジ訓練期間の頃だ。

…って…そんな前から？

そんな前から目付けてたのに、何で今更…？

「正直、タイプ。…て思ってた。だから宮元にそれとなく聞いてもらった。」

たしかに、宮元さん…紹介して欲しいって言ってる友達がいるって言ってたっけ…？

「彼氏がいるとか言うんなら…紹介してもらってもしょうがないからな…好きな男がいるって言われても振り向かせるのは、面倒だし…」

牧はため息をつきながら遠くを見つめた。

麻美ちゃんはその牧に話の続きをうながした。

「じゃ、なんで志摩ちゃんに執着してんのさ？志摩ちゃんは学の事好きなんだって宮元から聞いたんでしょ？」

「だからだよ。…日向が学のことを好きだからだ。」

…私が学の事を好きだったらなんだうちゅうの…？？

「ああ…だから何だ…？って顔だな？」

私って顔に出るタイプ…

「俺、一応は学の友達って事になってるけど、キライなんだよ。あいつ…。あの女にだらしない所が特に！…ま、俺も人の事は言えないけどさ…やり方が汚いんだよ…。…気に入ってる女があいつの毒牙にかかるのはイヤだ…」

毒牙……？？

バカにするように私は言った。

「かかるわけじゃないじゃん、そんなの。今までならあったかもしれないけど、私はもうあきらめたんだからね！！」

でも…顔を見たらまた好きに可能性はなくは、ない…。

仕方ない…と言った風なため息をつきながら牧は言った。

「あいつ…ガツコで『食い損ねた女が俺のバイト先の隣の店でバイトしてる。』って言ってたの聞いたんだよ」

…私は、食い損ねた女…ね…

まあ、あつてるけどさ…

…学って…思ったよりおしゃべりだったんだ…

いや、それ以前に私の事を知らない人間にそんな話して何になる????

いや、私の事を知らない人間だから話せるのか……?

………何が楽しいんだろう?

「普通、そんな話して何になるって思うだろ…?」

牧の問いに私は興味津々と頷いた。

「あいつだって、興味のない女の話なんてしねーよ…。あいつの口から女の話なんて久しぶりに聞いたくらいだ…。」

反論しようとして牧に言葉を遮られる。

「あいつはあんたを狙ってる。それは間違いないって!…チャンスがあればいつだってそのつもりなんだ…誰がさせるかよ………」

そんな…そんな取り越し苦労で今まで私につきまとってたの…? そんなことで…?

「あ…?あんたにつきまとってた理由?最初から言ってるじゃん。あんたが俺のタイプだったから。その上、学が狙ってる女だから。以上。」

この人、思い込みが激しいのか、人の話全然聞かないよね……

学が私を狙ってる……???

バカか?

ありえない妄想だ…。

しばらく黙っていた麻美ちゃんがポツリとつぶやいた。

「チャンスがあれば、いつだって…かあ…」

勝手に思い詰めてる牧が返事をする。

「おう、絶対、邪魔してやる…」

どっからどう聞いてもイヤな響きだな…



いまいち釈然としない説明に納得しきれなかったけど、そのうち飽きて、関わってこなくなるだろう…って…私は甘く考えていたんだ…。

## 第7話 激情

「あ、れ…?」

今日のバイトは櫻井のシフトだったはずんだけど…。

「なんで右京がいるの?」

右京が呆れ顔で言う。

「生徒会が長引いて、今日もバイトを変わって欲しいんだってさ」  
またかよ…。

確かに、櫻井は学校で生徒会長をやっているらしいのだが、最近は『生徒会が長引いて…』を常用し、他の人間の休みを貪り、バイトをさぼっていた…。理由はわかつてる…。

女に溺れている…。玲夏とイチヤつくのに夢中で、バイトどころではない…と言ったご様子。

大体、私が休みの日は私が被害に遭うのだが、私は最近、休みなくバイトに出ているため、最近では右京が被害に遭っている…。

「まあ、俺はいいんだけどね…」

右京は笑って言うてるけど疲れてるように見える…。  
ホントに櫻井には困ったもんだ…。

右京の休憩中、麻美ちゃんが買い物に来た。

「こんばんわ!」

明るくて良い子だ…。

「志摩ちゃん、携帯持ってる?」

「受け専だけどね」

私は商品をレジに通しながら答えた。

「教えて!」

その返事には困った。

なんていうか…

バイトの時だけじゃなくそれ以外の時間まで踏み込まれそうで…。

「牧には教えないよ。お願い！あたし、志摩ちゃんと友達になりた  
いだけだもん！！」

『友達』…この響きに一瞬揺らいだけど、学と関係のある、いかな  
る人間とも関わりを持ちたくなかった。ようやく吹っ切る事がでそ  
うなのに…。ふと、顔を見ると目をウルウルさせて見つめてくる…。  
かつ、かわいい…。

女の私が思うんだ。…こんな彼女を取られた牧はさぞかし学を恨ん  
だ事だろう…。…彼女が自分を振って学に行っただって事なら尚更だ  
…。

「ねーねー…！お願いいつ。志摩ちゃんの嫌がる事しないから…  
それとも志摩ちゃん、麻美の事…嫌いななの？？」

「……………」

計算か、天然かはわからないが、ホントに…かわいいと思った。結  
局負けて、携帯の番号を教える事になった…。

「牧には教えないで。あと、仕事中は出られない。あと…夜中也勘  
弁してね…」

麻美ちゃんは真剣な顔をして頷く。

「わかった！牧にも教えないし、バイト中や、夜中もかけないよ！  
悪い子には思えなかったので信用する事にした。

麻美ちゃんは会計済みの商品を袋に詰め終えて、私に向き直り言う。

「じゃーね！また後でー！」

と言つて帰っていった…。

ん…………？後で??

「ただいま。忙しくなかった？」

右京が休憩から戻り言った。

「全然。…んじゃ、私休憩もううね」

安らぎや、楽しい時間はあっという間にすぎるもの…。

15分休憩なんて、一瞬みたいなもんだ。

…私の休憩が終わるとなにより牧が右京と話していた。

「……………」

見たところ牧が右京をからかっていて、右京がムキになっているってところか…？

牧は遠目から私に気付くと笑顔のまま帰っていった…。私はそのままバコの売り上げの集計をとるため事務所へ向かい、レジに戻る途中、右京の様子をうかがった。顔が真っ赤だ

「ど、どうしたの？右京、顔真っ赤…トマトだ。」

「う…え…ああ？」

右京はうつろたえている…。

「……………牧が何か言ったんでしょ！？…何言ってたの？」

右京がここまでうつろたえるんだ、よっぽどの事を言われたに違いない！

私は右京を問いただす。しかし、右京は…

「いや、うん。なんでも、ないよ…うん」

あからさまに怪しい態度で『何でもない』と言い張るのであった…。バイト終了後、今日もいつものように駐輪場にいるのだろうと思っていたのだが、今日は誰もいない…。

「……………」

「ホントに解決したんだね。」

右京の様子も落ち着いていたので私は再び聞いてみる事にした。

「右京…ま…恩田君、右京に何て言ってたの？ある事ない事言われても困るし…。それとも私と関係ない事？…だったら私は何も聞かないけど…」

「うん…大丈夫。大丈夫。」

…。その話題に触れると右京は変になる…。

だから、その話題には触れない事にしよう…気になるけど…。

家に帰り、携帯を見ると、着信アリだった。

3件…。そのうちの2件は留守電が入っていた。

『ひな？唯衣だよ！あたし、瀬戸君と夏祭り行く約束しちゃっ

た！えへへ～それだけ！がちゃッー…ッー…」

もう1件の留守電を聞こうとしたところで電話が鳴り、通話ボタンを押した。

「はい…もしもし？」

『もしもし』

だれ？男の声だ…。牧……………？

「……だ…れ…？」

私はものすごく警戒した声でそう言った。

『……………片山だけど。』

……………は？

「……………」

『バイクのシートに番号書いたメモ紙あったから電話したんだけど…？』

バイクのシートに私の携帯番号を書いたメモ紙が……………？？私じゃないです私じゃないです私じゃないんです！

「メモ紙には…何て？」

恐る恐る聞いてみた。

棒読みで学は答えた。

『私の携帯番号です。さみしかったらかけてきてもいいよ。志摩日向ヨリ。』

あいつだ～～～…！

私は妙に冷静に学に言った。

「……………。それ、私じゃないから。番号は私のだけど…犯人分かってるし…メモ紙…捨ててくれていいから。」

そう言っと、学の返事を待たずに電話を切った。そして、残りの留守電を聞いてみる事にした…。

『やつほ～志摩ちゃん元気～？？あたし、学に志摩ちゃんの携帯番号教えといたからねっ。牧には教えるなって言ってたけど、学には教えるなって言われなかったし…。電話ー、かかってくるといい

ね〜！じゃね！』

じゃね！・・・

じゃ、ないよ！！！！

すっごいビックリした！すっごい緊張した！すっごい……

ドキドキした……？

「なんでこんなことするかなー……」

やっと学の事を考えなくても楽しい日常になったのに……吹っ切る事が出来たのに……。なんで邪魔すんのかな……？

怒ってるはずなのに……完全に怒りきる事が出来ない私だった……。

翌日、私は久々の休みで、家でくつろぎモードだった……。

そんな時電話が鳴った。

「あーもー！櫻井からじゃないだろうな！」

苛立ちながら電話に出た。

考えてみたら今は夕方の6時半。

バイトの交代ならもつと早く電話が来るはずだ。

『……片山だけだ』

「……はい????？」

思わぬ人からの電話で拍子抜けした。

「え、え？な、なんで、え？なに??？」

あからさまに動揺してる私に構うことなく学は続けた。

『今日、バイト休みだから、会わない?……ああ……そっちがバイトか……』

「……え?今から?」

『いや、無理にとは言わないけど……』

この人って、聞き返すと引き下がるんだよね……。これもテクニクの一つなんだろうか?……引き下がられると『あ、別に無理じゃない

し』って言いたくなるし……

「いいけど、どこで…？」

私にだって学習能力はある。この前と同じような過ちは犯したくない。

すると学は警戒する私を察っしたかのようにクスツと笑い言った。

『ウチがいやなら外で会おうか。…ウチの近くの公園とか…ウチ覚えてる？』

「なんとなく…そういうえば、近くに大きな公園あったよね…？」

『その…ベンチ。野球場じゃなくて、公衆トイレのこの…』

公園か…健全なデート（？）…とも言えなくはない…

「わかった。今から行く。」

そう言って電話を切った。

公園に向かうと約束のベンチに学は座っていた。

私は近くに自転車を止め、学のそばまで歩いていった。

「……………」

学は無言でタバコを吸いながら自分の隣に座るよう促した。

「……………。なにか、用だった？」

あまりにも態度の悪い学に、イラだって私は聞いた。

「別に、ヒマだったから…」

そか…ヒマだったんだ…。……………ってふざけんなよ…

「タバコ…未成年のうちから吸うと身長止まるんだって…。あと、依存性が高まってなかなかやめられなくなるらしいよ…？」

私が言っつと、学は不愉快そうにタバコを近くの灰皿に捨てた。

お願いだから…

機嫌が悪い時に呼び出すのやめてくれない…？

他の女だったら体で慰めるとか他に方法はあるのかもしれないけどさ！

私に何を求めてんのよ！どいつもこいつも……！！

イライラがピークに差し掛かった時、学が口を開いた。

「俺の事、まだ好きなの？」

「……………」

何を自意識過剰な事を……って言いたかった。……言えなかった。

悔しいけど……『わからない』って言うのが一番正しかった。

「わからない……」

私のその答えに不服そうに聞きなおした。

「『わからない』……？自分の気持ちなのに？？」

『気持ち』……学の口から聞くと妙な響きだ……

私が口を開こうとした時、学の携帯がなった……

学は躊躇する事もなく電話に出た。

「……ああ……ん、うん、わかつたいいよ。ん、じゃ」

「……………」

『ちよつとごめん』とかさあ……ないのか？普通……

電話を切ると学は私の方を向き、こう言った。

「じゃ、俺帰るわ。」

は？なにそれ……。とも思っただけど、話の内容がすぐに推測できた。

「……彼女、来るの？」

「まあね。」

悪びれもせずに言う彼に胸が痛かった……

「もしかして、私って……彼女が来るまでの暇つぶし……？」

「……ああ」

ここまでバカにされて、それでもまだ好きだなんて……私が言うつもりも思っているんだろうか……？悔しいよ……泣けるほどくやしいう……

「行か、ないで……」

こんなヤツ……大嫌いなのに、まだ好きだなんて……

「行かないで……私と、いて……」

なんでこんなこと、自分の口からスラスラ言えるのか不思議だった。急に試してみたくなっただのかもしれない……



少し、戸惑ったように学は振り向いた。

「お願い、一緒にいて。おねがい…！」

胸が、痛いくらいドキドキして、足が震えて、頭がクラクラする…。学はなんて応えるだろう…??

「好きなの…あきらめようって何度も思ったけど、思ったのに…」  
学が私に向かって歩いてくる。そして私の前で立ち止まり、こう言った。「いいよ…うん…キミと一緒にいても…」

さっきまでと違い、優しい口調だった。雪中、告白した時みたいに優しい感じだった…。

けど…すぐに目つきが変わって…

「今すぐここで俺に抱かれたらね」

天国から地獄に突き落とされた気分って言ったらわかりやすいのかな…?

悪意のこもった学の目…。

安心した途端、どん底に突き落とされたみたいなの。

何を言っているのか全く理解できなくて…

「は？」

って感じだった…。

そんな気だって、全然なくせに…。

最低、最悪。私も私、こんな男、彼女の所へ早く行かせればいいのに…どうして？

煮え切らない私に、学の顔色が変わった…。

学は素早く周囲を見渡し、私を公衆トイレへ連れ込んだ…。

私の肩を壁に押し付け、感情的にシャツのボタンを剥いだ。

「い…っ、や！」

ボタンが弾け飛び、パラパラと床に落ちた…。

「俺の事が好きだ…?一緒にいたい…?こんな風に…乱暴に扱われてもかよ…?いま、ここで、俺に犯されても同じ事が言えるのか！」

？」

こんな…感情的になった学を初めて見た。

怖い…というより、不思議だった…学がどうして怒っているのか、  
…どうしてこんなに感情的になるのかわからなかった。

「…抵抗しろよ…、逃げてみるよ…前にしたみたいに、逃げてみるよ…！」

私の胸を乱暴に押さえた学の手が、微かに震えてる…？

「お前といると…イライラするんだよ…！」

学が私から手を離し、逃げるように去って行った…。

私は、今起こった事が飲み込めなくて呆然としていた…。

トイレから出ると、外はもうすっかり暗くなっていた…。夜風にさらされて、ようやく、現実に戻された。

シャツのボタンは飛んで半分以上ない…。

震えが止まらなかった…。私、何が悪かった…？

私…私は…？

「日向？」

すぐ近くで自転車のブレーキ音が聞こえた。

私は肩をすくめて声のした方を向いた。牧だ…。

「お…やっぱり、人違いだったらどうしようかと思った。麻美ん家の帰りだったんだ。麻美ん家ここらへんでさ…」

牧はそう言いながら近づいてくる…

「いや…来ないで…！」

こんな姿誰にも見られなくなかった…。ベンチに座りうずくまった。

「日向…？どうした…？」

牧は構わず近づいてくる…。

「なんでもいいから、来ちゃいやあ！…来ないでえ…っ」

牧は私の前に滑り込んで来た。そしてすぐに私の異変に気が付いた。

牧は私の肩に手を置き、なだめるように訊ねてきた。

「日向…。どうした…？」

すぐに私の異変に気付き牧私に訊ねた。

「それ…誰にやられた？知らないやつか？…知ってるやつか？誰が…こんな事…？…まさか…っ！あいつか？…なあっ！」

私はただひたすら首を横に振った。

「私がバカだった、何もかも、私が悪い、誰も悪くない、私が馬鹿なの…っ」

牧はそれ以上私を問い詰める事をせず、私の両肩をなだめるように叩くと自分の着ていた服を脱ぎ、私に手渡した。

「着な。その格好じゃ危ないから」

そう言うのと牧はどこかへ走って行った…。

そして、すぐにもどってきた。

「ほい」

見上げると缶コーヒーを差し出す牧の姿。

「あり、がと…」

牧は私の隣に座り、自分の缶コーヒーのふたを開けた。

私は一息つくとも呆れたように言った。

「私って…なーにやっても空回り…一人相撲…情けないよ…」

「俺だって空回りで一人相撲だ。」

牧が立ち上がり、おどけて言った。

「じゃあ空回り同士つきあうか？」

「……………」

一瞬その場の空気が固まった。

私は愛想笑いを浮かべた…。

牧が、我に返りあわてて言った。

「ご、ごめん！俺、こんな時に、こんな冗談…っ、…ごめん」

私も立ち上がり、慌てる牧にゆっくりと首を横に振り、牧を見た。

「わかったでしょ？あいつは私を狙ってなんていなかったって。だから、牧が私に近づく理由もなくなったわけで…」

イヤってくらいわかった。私はこんなに学に嫌われてたんだって事…私は慌てて牧に背を向けた。

男なんか…恋愛なんてしなくても今まで平気で生きてたのに…恋愛  
なんか…いい事なんて一個もないよ…！

「日向…我慢するくらいなら泣けよ…。」

背後から心配そうに語りかける牧に対して私は思いつきり首を振った。「やだ！絶対泣かない！私は恋愛なんかで絶対泣かない！」

言った後で胸がカーッと熱くなつて、言いようのない悲しさが襲ってきて、牧に八つ当たりしたくなった…。

「なんでよ…。なんで優しくするのよ！いつもはバカにするくせに…！こんな時だけ優しくしないでよ…っ！」

そう言つて、私は両耳を塞いだ。

優しい声も何もかも聞きたくなかった。

牧は私の正面にゆっくりと立ち、おもむろに私の頬を撫でた。

顔が…熱くなる…。

そのまま、手を頬に当てて私を見つめた牧は今まで見た事もない表情をしていた…。

慈しむような…そんな顔…私はその顔に見とれてしまった…

ゆっくりと牧の顔が傾き、私の唇に牧の唇が触れた。

イヤだとは感じなかった…。

私は、牧の唇を受け入れていた…。牧は私を抱き寄せ、唇が強く触れても牧を突き放そうとは考えなかった。

それが、恋なんかじゃなくて、甘えなんだとわかっていながら…

## 第8話    ピンクなお誘い???

『学をあきらめるう!?!』

バイト前に、唯衣から電話が来て、最近あつた事を話していた…。

「…結構な事じゃないか……」

だったら大声で怒鳴らないでくれ…。

止めたりはしないわけ…?…止めて欲しいわけじゃないけど。

昨日の事は話さなかった。…話が長くなりそうだし、なんか怒られそうだから…

『しかし、どういう心境の変化?新しい男でもできたか…?』どうしてそういう風には話を持って行きたがるかな…?

私は呆れて言った。

「別に恋愛なんてしなくて生きていけるでしょ?恋愛なんてもう、うーんざり」

…私が言うのと唯衣の声が暗くなる…

『いかなー…まだ18なのにそんなオバハンみたいな事を言っちゃ…』

「と、とにかくそういう事なんで、これからバイトなんで、この辺で!」私は慌てて電話を切った。

また男を紹介する…なんて言われたらかなわないもん…。

今日のバイトは櫻井と。か…またのろけ話聞かされると思ったら…行きたくないな…

行かないワケにはいけないので行くけど…。

「お……?」

またかよ……

「今日も右京なの?…まさか昨日も?」

「いや、昨日は俺、元々出番だったから…。宮元が替わりに出てた。」

ふー…ん…

「なんか…昨日、宮元が店長に直訴してたけど…」

『生徒会』を口実に…は通用しなくなってきたますなー…

「いや、今日は『母親が風邪引いて家の事しないといけないから』…と」

「右京…断りなよ…。ウソなのバレバレじゃん…」

右京は無言でニコニコしているだけだ…。怒る元気もない様子…。不憫だ…。

考えてみれば私は昨日休んだけど、右京は今日休みだったはずで…私よりも出番が多いって事だね…？大丈夫かな…？

しかも今日は結構混んでるし…。忙しくても、疲れてても笑顔！コレ鉄則…

1時間くらい経ってもレジは混んだままだ…。

「いらつしゃいま…せ」

学の彼女の福井さんが今日はお友達とお買い物…。

心なしか、視線が痛いんですけど…。

何故か福井さんより友達の視線の痛いような気がする…。そんな風に思うのは、やましい事があるからだろうか…？

…やましい…？どこが？私は悪くない！…と心の中でキレてみる…。

「ありがとうございました。またお越しくださいませ！」

極力笑顔で接したけど、顔が引きつってるのが自分で分かった…。

ふ…一気に疲れたよ…。

「なんか、一気に空いたねー…」

時計を見ると8時15分。

「休憩、行ってきたいいツスカ…？」

右京が力なく振り向く…。その顔にいつもの爽やかさはなく、私はひたすら頷くしかできなかった。

「い、いつてらつしゃい…」

私の休憩もあげたいくらいだよ…

フラフラと売り場をウロつき、食べ物を買って休憩室へと歩いていった…。

大丈夫かな…？

15分後、私の心配をよそに右京は元気に戻ってきた。

「志摩さん、休憩どうぞ」

男の子はタフだなあ…とか思いながら私は食べ物を手に取りレジに向かった。

「いらっしやいませ」

の右京の挨拶に会釈をして商品をレジに通してもらった。

「俺の家、今日誰もいないんだー。今日は俺一人。」

嬉しそうに言う右京。

「へー、たーのしそうだねえ…」

私がそういうと、右京はレジの手を休め、私の顔を見ながらちよつと真顔でこう言った。

「遊びに来る？」

……と。

さつき、

家に誰もいないって言ってたじゃん？

遊びに来る？…って…なんか怪しげに聞こえるのは私が学に毒されたからか…？

「んー…きよ、今日は、やめようかな…？」

じゃあ、いつならいいんだ？…と自分に突っ込みを入れながらも私は続けた。

「友達の家、泊まりに行くし…」

「そっか…残念」

右京が言う社交辞令でもホントに残念そうに聞こえて『悪い事したかなー？』とか思ってしまう…。

休憩中、唯衣から電話が来た。バイトが終わったらそのまま唯衣の家に泊まりに行く予定だったから。

それで、つい、ポロツと…さっきの右京とのやり取りがあった事を話してしまった…。

『あああああ！？それってピンクなお誘いじゃん』

ああホラ…キミに言うかね、なんでもそういう話になるからね、黙ってようとしてたんだよ…。

ああ…言った私がバカだった…。

「ああ。でもホラ、もう断っちゃったし…」

樂觀的な物言いに唯衣は喰ってかかる。

『何、気楽な事言ってるのさ！…ああ…もういい！後で行く！』

そう言々と電話を切られてしまった…。「気楽」って…？？

唯衣との電話で休憩のほとんどの時間を使ってしまった…。

休憩から戻ると今日も牧が右京をからかっている…。右京がなんでキレないか不思議なんだけど…？何を話しているんだろう？？

私は出来るだけ気配を消して二人に近づいた。

「眼鏡くーん、いつになったら告るんよ？ボヤボヤしてたら取り返しつかなくなるよ？」

うんうん…？

「日向だってさ、ボヤボヤしてたから收拾つかなくなってるんだしさあ…」

うるさいなっ！…そこで私を引き合いに出すか？普通…

右京は黙って聞いている…聞いているっていうより…耐えてる…？？

「昨日なんてさ、かゝわいかったな…んでもって」

！？

「柔らかかったな…日向の」

「牧」

私は牧の言葉を切った。

「！！！」

私がいる事にホントに気付かなかったのか二人は驚いて私の方を見た。

そして右京は私が牧の言葉を切ったのが気になったのか、牧に向き



直り問い詰めた。

「なんだよ…？志摩さんに…何かしたのか？」

牧は気を取り直して、右京に語りかけた。

「あ、それはね」

「牧！！」

「だってえ、眼鏡くんが言えつてえ…」

「それ言ったら…私があんたを殴るよ…」

私は冷やかな目で握り拳を牧に見せる。

「恩田牧くん退場…」

牧は何か口答えしようとしていたが私は聞く耳持たず、牧は残念そうに帰っていった…。

右京は最後まで気になるらしく今度は私に聞いてきた。が、

「私、タバコの売り上げ集計行つてきます！」

私はそれだけ言つて、逃げた…。

怪しいかとは思つたけど…右京には関係ないしそんな話したところで仕方ないからさ。

私がタバコの売り上げ集計から戻ると、右京のレジには学がいて、右京は千円札を数えていた。その間、ヒマそうに店内を見回してた学と目が合ったが、私は露骨に嫌なものを見るような目で学を一瞥し、目をそらした。

…今、一つっつ番会いたくない人だった…。

バイトが終わると唯衣が外で待っていた。

「お疲れ様でした…」

右京はバイクにまたがりエンジンをかけた。唯衣はそんな右京に声をかけようとする。

「右京くん…」

唯衣の声はエンジン音にかき消されて右京には届いていないようで右京はバイクで帰って行つてしまいました。

すると唯衣は何を思つたか、自転車にまたがり、右京を追いかける

…。

「えゝ…無理だつて…やめなよ…。」

バイクを追つて、自転車で爆走する女、唯衣…。  
とてもじゃないけど、私は唯衣に追いつけない…。

ゆっくり、二人が通つたであろう道を自転車で追尾する…。そして、  
昨日の公園から唯衣の声が聞こえる…

「……………！！……………」

遠すぎて何言つてんのか、わかんないよ…まあ、私を呼んでいる事  
ぐらいはわかつたけど。

あゝハイハイ行きますよ……。

私は唯衣のもとへ向かつた…。

「はゝ…はゝ……………」

そんなに苦しいならやめりやゝよかつたのに…

「結局、追いつかなかつたでしょ…？もう帰ろゝよ…」

唯衣は息を切らしながら指差した。

「はゝ…学の…家…ぜゝはゝ…裏……………」

学の家、裏……

「学の家の裏？」

力強く頷いた。

「な、何…？本気で私を右京の家に行かせる気…？？」

唯衣は殺気立ちながらも強く頷いた…。有無を言わさず…

「えゝ…イヤイヤイヤイヤ…ムリムリムリムリ……………」

私は唯衣に右京の家まで引きずられてます…。

「この期に及んでまだ、言うか！」

「この期に及んで、つて…ピンクなお誘いつて決まつたわけじゃないしさ…」

逃げ腰な私の発言に業を煮やした唯衣は、私に尋ねるように言った。

「じゃあ何か？こんな遅くに男と女二人きりでトランプでもやろう  
つてか…？」

唯衣の迫力に圧倒されながらも逃げ腰な態度は崩さない私。

「イヤイヤイヤイヤ…ピンクなお誘いなら、それはそれで困るんだけどさ…」

「あゝゝゝ往生際の悪い子だね！ピンクなお誘いじゃなかったらトランプして帰ればいいんだ。ピンクなお誘いだったらやつちやえばいいじゃん！右京君いいじゃん！優しそうだし…初めての相手にはもってこいの相手でしょ？」

『初めて』…とか生々しい事言うな…！

「あー…うるさい、うるさい…。嫌がりやー無理には襲わんって、学じゃないんだから…」

そんなのわからないじゃないかー…！

唯衣は私の事などお構いナシに右京の家の前まで私を引きずりこんだ…

## 第9話 吐き出せばいい

唯衣は有無を言わず右京の家のチャイムを押して、私をドアの前に押し出した。私は唯衣の後ろに隠れようとするも一歩遅く右京が家から出てきた。

「こんばんわ！あたし、ひなの友達ですう。どおも〜！コレ届けに来ました。…じゃ、あたしは用済みなんで、おいとまします！あとよろしく…」

唯衣は言いたい事だけ淡々と吐き出すと、とつとと帰って行った…。私をなめるなよ…お？唯衣の行動なんてお見通しじゃ！

「あの、お願い。10分かくまってくれないかな…？」

「え…？10分？」

私の変なお願いに右京は怪訝な声を漏らす。

「アレ、10分は見張ってるから…10分経つても家から出て来なかったら私が観念したんだって思ってる帰ってくれると…思うんだ…」

どこに潜んでるかわからない唯衣に聞こえないように私は右京に言った。

右京はわけもわからないまま私を家に招きいれてくれた。

「お邪魔します」

「どうぞ〜」

家の中には人はいない。ホントに右京一人だったんだ…

「そこらへん、座ってて。今、飲み物…なにがいい？」

「あ、おかまいなく…」

私は居間のソファーに腰掛けながら言った。右京はテーブルに飲み物を置いた。

「どうぞ。10分って結構長いからね…」

右京は私の隣に座った。

「ごめんね、ホント…」

右京には何がなんだかわからないだろう…。私は説明する事にした。  
「ホントはあの子の家に泊まるつもりだったのね…。でも、私がついポロツと…右京に『遊びに来ないか』って言われた事話ちゃって…あの子、勝手に舞い上がって」

そこまで言って私は右京の顔色を窺った…。

右京はいつもの穏やかさを失わずただ私の話を頷きながら聞いていた。

「でね、『こんな夜遅くに誘われたって事はピンクなお誘いに違いない！二人きりでトランプするつもりなわけないだろ！』って…強引に…」

「ピンクな…お誘い??」

ああ、こんな事一般用語でも何でもないもんな…。

「ええつと…ピンクなお誘いって言うのは…その…あ、あのね?」

私は気を落ち着けるために飲み物を口に運んだ…。

右京は真顔で考え、

「あ…語感でなんとなくは…XXXな、お誘いの事ね…」

「ガホ…ッ!」

あまりにもストレートな物言いに飲み物を吹き出してしまった…。

「ああゝ！大丈夫??ごめんごめん…違った?」

「ゴホ…ツゲヘツ…違わないけど…。ストレート…過ぎ…鼻からコラが…痛い……」

私が落ち着いて、また話に戻った…。

「ごめんね…なんていうか…えらい早とちりで巻き込んだじゃって…。

「いや…まあ、そういうの、全く思ってなかったわけでもないし…。

そこまで言つと右京は私の方を見た。

「志摩さんが許してくれるんだったら、それもアリかなって…」

！！

なんて言うか、このテの雰囲気はトラウマになりつつあるというか……。

私はわざとらしく思い出したように言った。

「あ！ね、右京、この前から、牧が来ると様子変だったよね…？何言われてたの？」

右京はちよつと言いつらそうに困っていた。

「あ、別に言いたくないんだったらいいの！私に関係ない話なら別に…うん」

自分の知らないところで自分の話題が出てると知りたくなるだけで…。

「いや、志摩さんの話なんだけど…」

「言いにくい話題の、私の話をしてんだ…？」

気になる…でも、聞いていいものか…。やがて、意を決したように右京は言った。

「アイツの言うことだからあんまし信用してないんだけど。志摩さんが『初めて』だって…。『まかり間違ってお前が相手する事になったら優しくしろよ』って…」

ヤブヘビ…

聞かないほうがいい事もあるよね…

「あ…、そ、そんな事話してたんだ…へ…あいつ、そんなことをね…」

怒りなのかなんなのか分からないけど私の声は妙に震えてて可笑しかった。

あの、キレイな顔を傷物にしてやろうかね…

頭の中は牧に対する力の抜けた怒りみたいな変な思いに気を取られていた。

そんな時、右京の手が私の手に重なった…。

「ボーっとしてたら、志摩さんが誰かのものになるかもしれない…とも、言ってた…」

言ってる右京の顔が、今まで見た事ない『男の顔』になってた…。  
色っぽいかも…なんて、他人事のように見てた…。

いやじゃなかった。この人にだったら恋できるかもって思った。

右京の顔が傾き、私も素直に目を閉じた。

P i P i P i P i P i ……

携帯電話のけたたましい音が静まり返った部屋に響く…。

「……！」

私達は一斉にお互いから体をのけぞらせ、お互いに体ごと反対を向いた。

緊張してる時って呼吸してないのか…？ってくらい空気を欲する私達…。

「はー…はー…」

二人で息を整えた。

ただでさえ、緊迫した状況で、心臓バクバク言ってるのに、携帯の着信音は心臓に悪い！

「誰よ一体？！」

私は携帯を手にし、液晶を見て出る気をなくした…。

『学』と表示された着信…。私は携帯をテーブルに置いた。

「出ないの？」

右京がまだ荒い息を整えながら言った。

「いいよ、どうせまた、暇つぶしの相手させられるだけだからね…」  
投げやりな私の様子を見て、誰からの電話なのか右京は察したようだった。

「出ればいいのに…。じゃないと、またかかってくるかも知れないよ」

いつもなら…これだけ鳴らせばとっくに出てるはずなのに…これだ

け鳴らして出なかったらあきらめればいいのに…。

「志摩さん…出なよ。言いたい事があるなら全部言っちゃった方がいいって!」

右京がそう言うので渋々電話に出る事にした。

「……………はい……………なに?何か用?」

露骨な態度で電話に出る私。学は私のそんな態度も意に介さずマイペースに話してきた。

『今日、家に誰もいないから…来ない?……………会いたい』

「行かない」

私は即答した。

呆れていた…『会いたい』って言葉に女がみんな、揺らぐと思ってるのか?私は、再び口を開いた

「先客がいるし。…彼女を呼べばいいんじゃない?たくさんいるんですよ?」

よりもよって、何で私を呼ぶの?…なんか、段々、腹が立ってきた…

「昨日の今日でよくそんな電話かけて来れるね…?どんな神経してるのよ…」

夜が明ければ昨日の事を忘れられるオメデタイ頭の持ち主なんだろうか…?

「悪いけど私、今すごい頭にきてんのよ…」

学を相手にスラスラ言葉が出てくる。感情的に、というよりは冷静に言いたい事だけ言っている…

「ヒマだから会おう…?さみしいから会おう…?私が喜んで行くと思ってた?…悪いけどね、私だって暇つぶしの相手なんて冗談じゃないのよ」

学の返答はない。聞いているのかどうかも怪しいもんだ…。

「お望みどおり、あきらめてあげるから…もう電話して来ないで!」

学の返答を待たず、私は電話を切った。



虚しかった・・・

聞いているかどうか分からない相手に一方的に自分の思いを吐き出すのって…ホントに虚しい…。

学と関わると『虚しい』だけ。もう、ホントにそれしかない…。

私は右京に背を向けたまま独り言のように言った。

「……………雰囲気ぶち壊し…だね」

右京はいつもの優しい口調で私に訊ねた。

「志摩さんの言いたい事、全部吐き出せた？」

「吐き出したけど…相手には届かなかったな…最後まで」

右京は脱力したようにソファーに腰掛け言う。

「ホント、ついてない…いいとこだったのに…」

私は振り向き、右京を見た。右京は天井を見つめ放心していた。

「ごめんね、ホントに…」

謝る私に右京は我に返り、慌てたように言った。

「別に志摩さんに謝って欲しいわけじゃないよ。…電話に出ろって言ったのも俺だし…。いや、電話来た時点でもう、俺のチャンスは終わってたんだよな…」

「???」

右京は私を見据え言った。

「電話が来るまでは志摩さんは確かに彼の事を忘れてた。俺の事、少しでも考えてくれてた…違う？」

確かに…。学の事なんかすっかり忘れてた…。

右京とこのまま一緒にいてもいいと思った。

「電話が来ちゃったからな…」

言って右京は、参った…という風に右京は頭をかきむしる。

「これでもう、志摩さんの頭から彼が離れない。あと何時間一緒にいても一緒。俺の事だけ考えてくれる事はもうなくなった…。」

決して好きだって気持ちじゃない…凄く頭にきてる…けど、学が頭から離れない。

「志摩さん…行きなよ。今ならまだ間に合う。行って、彼に会って

分かるまで話した方がいいよ。」

『そんな気分じゃなくなったから』…って追い返されるかと思つてた…

『彼の所に行け？』

…右京がどうしてそんな事を言うのか、私は少し戸惑つた。

「このままだったら志摩さんはずっと彼の事を引きずる事になる。誰といても、誰と恋してもずっと、彼と誰かを重ねる事になる…」

右京は…そういう経験をした事があるんだろうか…？

「でも…私…。」

「あきらめる位だったら玉碎しちやいな。そうすればスッキリするよ？」

右京の言う事は妙に説得力があつた…。

「もし、玉碎したら俺でよかったらいつでも空いてるからさ」

右京はそう言うつと冗談交じりに笑つた。

私は右京に説得されて学の家に向かつた…

右京の言葉が頭から離れない…。

学を引きずりたくない…。

そう思いながらも、逃げたしそんな気持ちでいっぱいだった。昨日みたいな事があつたら、もう誰も助けてはくれない…そう思うと怖かつた。右京の事好きになるかも…本気で思つた。学からの電話で…学の事、考えないようにしても頭から離れてくれなかつた…。

気が付くと私は学の家の前にいた…。あれだけの事を言つたのに、ここまで来た私を学はどう思うだろう…？

もう、他の彼女が来ているかも知れない…。

彼女とはちあわせたら、彼女になんて思われるかな…？

ああ…いつもそうだ…私はいつも人の目ばかり気にしてた。いつも、いつも…今だってそうだ！他人ばかり気にして…

恋をする前の私はこうじゃなかつた…。  
恋をして私はダメになつた。

なのに…こんな自分の事、嫌いになれない…。

人の目なんてどうでもいい。私は自分のしたいようにすればいいんだ…！

私は自分を奮い立たせ、学の家呼び鈴を鳴らした…。

外から見て、居間の明かりは消えていたけど、学の部屋の明かりはついていた。

しばらく待ったけど返答がない。もう一度呼び鈴を鳴らそうとした。その時、学の部屋のカーテンが開いて、学が顔を出した。

何か…言わなきゃ…

「暇つぶしのデリバリーでっす」

口を突いてでてきた言葉がコレ。我ながらかわいくないと思った…。学は私の存在を確認するなり…

素早く、部屋のカーテンを閉めた。

「……………」

……あゝあ…

まあ…そりゃあね…

あんな生意気な事を言っておいて何を今更…って、感じたよね…？  
…見事な玉砕っぷり…所要時間5秒ってどこ…？

少しの間、放心状態の私だったけど…

「ふふ…フラれちゃった…」

不思議とシヨックではなかった。不思議と笑みがこぼれていた。

「うん、私は頑張った。」

自分勝手な自画自賛だったけど、悔いはもう、ない！

『私は頑張った』って納得できたから…もう大丈夫…！

……いつまでもここにいても仕方ない…帰ろう…。

私は学の家玄関に背を向け一歩進んだ時だった…

…………ドゴォー！！

突然背後からものすごい音が聞こえて驚いて振り向くと学が荒い息で立っていた。

私は驚き、口を開いた。

「ど…どうした…の??すごい、音…」

「玄関…建て付け悪くて…」

息を荒くして答える学に私は後ずさりしながら言った。

「そ、そなんだ。大変だね…。あ…べ、別に、呼ばれたから来たんじゃなくて、友達の家で帰りで…そ、そう、うん、…き、気が向いたから…」

学は私に向かって歩いてくる…。ゆっくり、一歩ずつ。

「別に会いたくなかったわけじゃないし、好きでしようがないわけじゃないし、」

私は早口でまくしたてた。学は何も答えず歩いてくる。でも、虚しさは感じなかった。

「気まぐれで、意地悪で、何考えてんのか意味不明だし！」

私がそこまで言うと言は目の前に立ち、私の両肩に手を置いた。

「……………」

……………私は…怯えている？

学がすぐ目の前にいるだけで言葉を失ってしまった。

学はそんな私を抱きしめた。

「……………」

いきなり抱きしめられて混乱する私に学がようやく口を開いた。

「……………他に…言いたい事は?…全部吐き出しちゃえば」

予想もしなかった優しい口調に私の思いはあふれ出した。

「女と見たらエッチな事しか考えないし、私はどうせ暇つぶしにもならないし、彼女とかいっぱい、いるらしいし…私の事は…！」

思い切り吐き出したら涙が出てきた。

学は私の体を離し、まっすぐ見つめてきた。

「私の事……………どう思ってるの…?」

今まで、一番聞きたくて、怖くて聞けなかった…。

答えなんて分かりきってた…だけど、聞きたかった…。

もちろん期待なんか全然してない…

『別に。』って言われるのがオチだから。

『別に何とも思っていない』『好きでも嫌いでもない』…そう言われるのが怖かった…。

学は切なげな表情を浮かべて、顔を傾けた。

ゆっくりと近づいてくる学の顔を私はぼんやり見ていた…。やがて、自分の唇に学の唇の感触が触れて、ようやく学とキスしてるんだ…って自覚した…。

私達はキスを繰り返した…。何度も、何度もその行為に没頭するかのよう…。嬉しくて…嬉しくて…胸が苦しくて、痛かった…。ようやく唇が離れて、お互い小さな吐息をもらした後、学が言った。  
「俺の部屋、行こっか…？」

それがどういう意味かは私にもわかる。私は頷いた。

何故かはわからない。でも、後悔はしないと確信してたから…。

学の部屋、月明かりに照らされて…

私は初めて男の人と結ばれたんだ…

## 第10話 背徳

朝、目を覚ますと見覚えのない天井に少し戸惑った。

「……」

ふと横を見ると学が寝息を立てている。

夢じゃ……なかったんだ……。

時計を見ると6時47分。

……二度寝……ってわけにもいかないだろうし……。

………学は気まぐれな人だ。

昨日冷たかったかと思うと、今日急に優しくかったり……

昨日優しくかったかと思うと、今日冷たくされたり……

学が目を覚ます前に帰ろうか……？今の、幸せな気分をぶち壊される前に……

そうと決まれば、支度しよう……。

私は学に気付かれないようにゆっくりと体を起こした。

えっと、まず、は自分の着ていたものを目で探す……。

見つかったのでベッドから出よう……。

ん……？

学の手が私の手首を掴んでいる。

「……ん、おはよ」

学が寝ぼけて言う。

「お、おはよう…」

私もあわてて返事する。

「体は…辛くない?…平気?」

学の口から意外な言葉に驚きながらも私は言う。

「平気。学が、優しくしてくれたから」

「そか…」

学はもう一度眠りに入る体勢だ…。

私は一通り着替えを済ませた…。

もちろん、置手紙なんてしない。なんか、勘違い女って感じでイヤじゃない?

私は足音を忍ばせ、ドアまで向かった。

「ひな」

急に呼び止められ、驚いて振り返ると、学はベッドから身を起こし、私を見ていた。

「あ…なんか、眠そうだったし、起こさないで行こうかと…思ってた…」

「…帰るの?」

そんな…捨てられた子犬みたいな目で見ないでよ…。

そんな目で、学はこう言った…。

「また…会える?」

学の言葉に私は首を振った。

「もう会わないほうがいいと思う。…私の為に。会えば、学を独占したくなっちゃうよ…」

学はそんな私をじつと見ていた。

「昨日は…なんていうか、雰囲気盛り上がって…こんな風になっちゃったけど、学の気持ち私が私にはない事わかってるし…。」

私は自分に言い聞かせるように続けた。

「卑屈になる恋愛はしたくないから…」

「後悔してんの？…俺と、こんな風になって…」

学の問いに私は笑いながら答えた。愚問だったから…

「どうして…？ラッキーだったと思ってるよ？初めての相手が大好きな人とだったんだから」

じゃあ、あの時どうして逃げたんだ？…ってツツコミが入らなくて良かったと思う…。

自分でも、うまく説明できないから…

私の家の近くまで行くと家の前で見覚えのある人間がいる…。

櫻井…？

私は咳払いして櫻井に自分の存在を知らせてから、家の近所の公園に身をひるがえした。櫻井は後をついてきた。

公園についてから私は説教を始めた。

「ちよつとー！…やめてよねー！あんたウチのご近所じゃ不審者として記憶されてるんだからさー…」

不審者と言う不愉快なキーワードに櫻井が突っかかってくる

「不審者って俺の事ツスカ！？」

あんた以外に誰がいる？

「とにかく、不審者と一緒にいるとここご近所さんに見られたら居ずらいワケよ！あんたも、もう少し空気読んで行動してね」

「押忍…」

今、朝の7時前だぞ？私の迷惑も考えろ…。

今日は特別この時間に起きてたけど、普段はこの時間は寝てるっつうの…。

「で、何か用？…くだらない話だったら殴るよ」



すると、櫻井は神妙な顔つきで話し出した。

「玲夏と…うまくいってなくて…」

「あゝっ！？バイト、ズル休みして、毎日会っというて、うまくいってないもヘツクレもあるか！」

予想だになかった私の発言に櫻井も少々ショックを受けたらしく言葉が出ない様子…。

「…ったく！ばっかばかしい！右京にんな事言ったら殴られるからね！」

と、言いつつ、落ち込む櫻井を不憫に思い、私は声をかけた。

「別に…玲夏に別の男の気配…とかそんなんじゃないでしょ？何がそんなに落ち込むほどうまくいってないのよ？？」

櫻井が口を開こうとした瞬間、公園の近くの家から出てきた高校生が叫んだ

「あー！日向じゃん。おはよー！ラッキー 朝から日向に会えるなんてっ」

朝からテンション高い牧だと確認し私は訊ねた。

「牧！？あんたご近所さんだったの…？」

牧はこれ以上ない位ご機嫌な顔をして何度も頷いた。

「俺ん家ね、あそこなんだっ 今度遊びに来な〜。もちろん日向一人で」

そう言くと牧は『じゃ、もうガッコ行く時間だからー！』

…と言いつつ去って行った…

朝からのハイテンションにあっけに取られて我に返って櫻井に向き直った。

「で、アンタの話は…？」

「いや、あの人が見てたらそんな悩みアホらしくなった…」  
と、櫻井は言った。

でも、この時私が話を聞いてあげていればこの後に起こる事を、回避できてたのかも知れない…

近頃、私の周りではなんだかバタバタしていた…。

「最近、学の様子がおかしいんだ…。」

私と麻美ちゃんは公園でベンチに座り、アイスを食べながら話していた…。

「麻美ちゃん、学の話はもういいんだってば。聞いても『ああ、そう』位しか言えないよ?」

麻美ちゃんは木のスプーンを口に押し当て、考え事をした後言った。

「……………志摩ちゃん…学と何かあった?」  
ぎく…

「……………あつたんだね、それ最近?」

「……………2週間ぐらい、前…かな」

麻美ちゃんは私の答えを聞いた後、納得したのか何回か大きく頷いて言う。

「そんなくらいの時期だよ!学も牧も様子がおかしくなったの!」

「牧も…?」

興味なさげに相槌を打ちつつ、話を促す私。

「学は変に優しくなったし、会ってもエツチなしだし…。逆に牧はイライラしてて何に対してもキレやすくなったな…。学校もサボりがちになったし…って。聞いてる?」

私は溶けるアイスと格闘しながら頷いて続きを促した。

「牧って、見た目あんなんでバカそうだけど、勉強もできるし、すごく真面目で、学校なんかサボった事なかったし、あたし心配だよ…。」

最後の一口を頬張りながら私は言った。

「それって、牧の方が心配じゃない…?学の変…はむしろ『普通』で変、って事でしょ…?牧はやバイ方向に変わって事でしょ…?」

「二人して、変だから志摩ちゃんがらみかなー…とは思って…。」  
「何ソレ??」

麻美ちゃんは急に真顔になった。

「牧は志摩ちゃんとあった出来事に影響されやすいから…機嫌がメ

チャメチャ良くて気持ち悪いくらい優しい日もあったし…」

私に関係してるんだとしたら、興味が無いとか言ってられないけど、責任も持てないもんな…」

「麻美ちゃん、なんかあったらまた連絡してね？」

私は立ち上がりながら言った。

「ええ？もう帰っちゃうの??」

麻美ちゃんは立ち上がる私を見ながらつまらなそうな顔をした。

「これから別の友達のゴタゴタにも付き合わんとならんのよ…」

「そっかあ…大変だねえ…。わかったあ…。またね」

そう言つて麻美ちゃんは小さく手を振った。

別の友達の

ゴタゴタ……。

「な…なんでそうなるのか、私には理解できんわ…」

事の発端は唯衣からだ…。

片思いの瀬戸君を夏祭りに誘い、いい感じに思えたのだが、それ以降のイベントに誘おうとした時に『彼女ヅラしないで欲しい』と言われ、それから連絡を取っていないそうだ…。

一方、櫻井と、玲夏もギクシャクしてうまくいっていなかったらしい…。

そこで櫻井が玲夏の事を唯衣に相談した所から、事態がおかしな方向に…。

櫻井と唯衣が意気投合してしまい、どうせうまくいってなかったんだし別れる!…と、ノリと勢いで玲夏を一方的にフリ、くっ付いてしまった唯衣と櫻井…。

唯衣のさみしい気持ちはわからなくはないけど…

なんで櫻井なの…?だってあんた…玲夏に紹介する前にあんたに言ったら『好みじゃない』って断つてたじゃん??だから玲夏に紹介したんじゃない?玲夏『バッチリ好み!』って言ってたし…。櫻井は

…まあ、女なら誰だっていい…って感じなのはうすうす気が付いてたよ…

だったら学校の女の尻でもおいかけてろよ…あんたに玲夏っていうのだって破格な紹介なのにさ…もったいなかったのにさ、唯衣にまで手エだしますか…。

「……魔がさした…で、今なら間に合うんじゃないの…?」

「……………」

唯衣も櫻井も無言だ…。

この二人、私に何を求めているの…?

「ひな、あのさ、玲夏の様子見に行ってくれない…?」

玲夏の事は心配だけど、罪悪感で顔合わせにくいつてやつか…。私は、玲夏の様子を見に行く事にした…。唯衣に言われて…っていうのがシャクだけど。

玲夏はというと…

「あれ…? 志摩ちゃん! 久しぶりー!」

まるで…憑き物が落ちたかのように明るい……。

「あ、あたし、櫻井と別れたから…今は唯衣の彼氏」

ケロッツとして言う玲夏に私は謝るしか出来なかった。

「ごめん、玲夏。もっとちゃんとした男、紹介すればよかったよ…」

そういう私に玲夏は首を振り、泣き出してしまった…。気丈に振舞っててもやっぱりシヨックだよな…。

友達に彼氏取られたっていうか、彼氏に裏切られたっていうか…どっちもか…

玲夏を落ち着かせ、唯衣と櫻井の元へ急ぐ私だったが…

…とんずらか……

へー…そう…、そういう事をするんだ…

彼らは私に何を求めているんだ??

そしてバイト…

そして今日もサボリ…

そのままクビにしてもらえば……？

「右京、今日は櫻井…何だって？」

「普通に、生徒会が…って。さすがにちょっと…ね」  
我慢しすぎだ…キしろ、右京…

その日、店長が櫻井の家に電話をし、『生徒会が忙しくてバイトに出られないほどなら辞めてもらっても構わない』と、告げたそうなの…。

気を取り直して右京は明るく言う。

「まあ、櫻井の彼女って、ちょっとかわいいからね…バイトのサボってまで会いたい気持ちもわからなくはないんだけどさ…」

玲夏のこと…かな？

「…玲夏の事言ってる？だったらもう彼女じゃないけど…」

その日の帰り、玲夏の家に寄った。

「志摩ちゃん！どうしたの？」

玲夏は妙に機嫌よく私を出迎えた。

「あのね！唯衣に彼氏紹介してもらったのー！」

へ…！？

「唯衣のイトコ紹介してもらったのー！」

「いつ」

「今日ー！」

「……………」

手回しがお早い事…。開いた口が塞がらない…。

人様の恋愛事情には干渉したくないけどさ…。

なんていうか…男なら誰でもいいのか…って…

ダメならハイ次…って感じでいいのか？…と。いや…それで幸せなら文句は言わないけど…

それがイマドキの恋愛ってヤツなのか…？って私は疑問に思った…。

## 第11話 解けない…

第11話 別れと、複雑なキモチ

「別れて欲しいの…」

ほら、やっぱりね…？絶対長続きしないと買ったもん！

私、なぜか唯衣と櫻井の話し合い（？）に立ち会わされてる…。

私を立会人にしたのも、櫻井が逆上して襲いかかって来たりないために…でしょ？ハイハイ。

唯衣のこういうズルイところは好きになれない…。

こんな時だけよびだされて、私はいい加減ウンザリしていた。

付き合うのも勝手にしたのなら別れるのも勝手にしたら良いと思う…。

私は呆れながらその光景をちよつと遠くで見ていた。

櫻井はため息を一息つくと唯衣に言った。

「瀬戸…とか言うヤツがまだ好きなんだろ…？」

唯衣は何も言わずに頷く。

唯衣が瀬戸くんの事をまだ好きだと言う事を、わかっていながら玲夏をフツて唯衣と付き合ってたって言うのか？こいつは…？

…んなワケないじゃん…。

「もうこんな寄り道するなよ？好きなやつだけ追いかけてる？」

櫻井は唯衣の顔を覗き込み言った。

あー…寒いセリフ…。ドラマかよ…

言ってる自分に酔っている…って感じで、悲壮感は全く感じられなかった。

「じゃ、そういうことで…」と言って櫻井は逃げるように帰って行った…。

櫻井は本当にショックだったんだろうか…？

お互い、淋しいだけで意気投合して付き合っただけの安い関係だったんでしょ…？安い恋愛のエンディングは、やっぱり安っぽくて…後味がすごく悪かった…

今日はバイトが休みで、麻美ちゃんから電話があつて、前の公園で会う事にした。

「あたし、学と別れたの」

その時に麻美ちゃんにそう言われて私は耳を疑った。

「どうして？学に飽きた…？」

「まっさかあ！」

私の問いに麻美ちゃんはすかさず答えた。

「あたしが、フラれたの！まー…、学校にいる『学の彼女』は全員フラれたね…」

「……………」

「あたし、牧と付き合ってる時って嫌なヤツだったの…牧、優しいから、それに甘えて、どんどんやな女になってってさ…。だから優しくない学と付き合ったらなんか変わるかななんて思ったんだけどさ…変わったのか正直わかんないや…」

こんな時、何て言つてあげればいいんだろう…？

そんな事を考えていた時、麻美ちゃんと目が合った。

「やあだ！志摩ちゃん、そんな顔しないでよ！あたしは平気だよ、うん、全然平気！」

「我慢、してない…？」

つい、余計な心配してこんな事を言ってしまう…。

「志摩ちゃんは本当に優しいんだねえ…麻美、だから志摩ちゃん好き！」

そう言つて麻美ちゃんは抱きついてきた。

私は麻美ちゃんの頭を撫でた…。

こない子…学はどういうつもりでフツたんだろう…？

この子の何が入らないって言うんだろう…？

「大丈夫だよ…志摩ちゃんは人の事考えすぎ。…自分の幸せだけを考えなきゃ」

…すぐに…学の顔が浮かんでしまう…。

学が好きで、私の事を…私の事だけを見て欲しいと思った…。

そのうちに何番目でもいいや…って思うようになって、

ああいう事になったけど…

いざ、学の部屋で朝を迎えてしまったら…

やっぱり私だけを見て欲しくなって、でも、冷たくされるのが怖くて…逃げた。

…頑張る事から逃げてしまった。

「志摩ちゃんは学の事…もういいの？忘れちゃうの…？」

私は笑って答えた。

「ん。バイト中に店に来るけど、顔見ないように避けてる…。

私、自分に甘いから、学の顔見たらまたすぐ好きになっちゃうからね…」

「電話とか…来ないの…？」



そういえば、麻美ちゃんは私の携帯番号を学に教えた張本人…だったっけ…。

「最初はね、来たけど、最近は来ないな…」

「そか…。志摩ちゃん、学の事避けてんのか…」そういう会話をし  
て、麻美ちゃんと別れた。

家に帰ると、しばらくなかった恐怖が訪れた…

櫻井が家の周りをうろついている。

お前ホントに、いい加減にしろよ……？

櫻井は遠目から私に気付き、近づいてきた。

わかったわかった…偶然ですって言うんでしょう？

「志摩さんに会いたくて！」

予想が外れた…。少しは成長したんだね…。

でも、私に会いたい理由はわかってる…私に愚痴りたいんでしょう？  
私に慰めて欲しいんでしょう？私は近くの公園で話だけ聞いてやるこ  
とにした…。

また、家の近くうろつかれても困るし…。

この公園の奥のほうに藤棚があつて、

そのそばのベンチで寝てる人がいるので襲われる心配はないと思  
う…。

私は櫻井に口を挟む間も与えずまくし立てた

「自業自得！同情の余地ナシ！玲夏の方がかわいそうだったよ！」

うなだれながら櫻井は言う。

「わかつてはいるんですけど、誰かに甘えなきゃやりきれない夜も  
あるんですよ…」

知るかよ！しかもなんで、私に甘えようとしてるの??

「私に甘えられても困るよ！私、今回の話に何の関与もしてないんだし！」

…だから甘えやすいのか???

大体、私に甘えようと考える事自体考えが甘くない？

「私、自分以外は甘やかさない主義なの！」

見事な開き直りっぷりに自分でも感心するが、なんとなく必死だった…

櫻井の言う『甘え』とは体で慰めるという意味に他ならないから…その証拠にさつきから流れてる変な空気に気付かないフリをして振り切っている。

「あのさあ、甘えたいんだったら別の人間がいるでしょ！…なーんで私なの???玲夏の所にでも戻ったら!??」

「玲夏には…ひどい事したし、今更、会いには行けない…」

…なるほどね…キミの考えが手に取るようにわかるよ…。玲夏に悪いなんてホントは爪の先程も思ってない。今更フツた女の所に戻るなんて、かつこ悪くてできないと思ってるだけ…

生意気に、プライドだけは一人前…

あ、でも、玲夏にももう彼氏がいるんだっけ…唯衣のイトコ。

こいつ、ホントに誰もいないじゃん…。

彼氏のいない友達なんて唯衣しかないし、その唯衣にフラれたんだから…

……………。

『二兎追うものは一兎も得ず』…みたいなもん？

結局誰もいなくなっちゃった…

哀れな男…。

っていうか…女欲しいなら学校で探せばいいと思う…

私はム力つきながらそんな事を考えていた。

ふと気がつくと櫻井は私ににじりよってきてた…。

「え？な…っ、何よ？？」

「俺にはもう、志摩さんじゃないんです！」

自分の世界に勝手に入って、『俺にはお前しかない』発言されても…！

嬉しくない…っていうか、大迷惑だし！

「ほ…お？消去法、妥協案、で、日向に迫るか…。  
いい身分だなあオイ…。」

二人しかいないと思っていた公園に私達以外の声が聞こえた。  
私は暗闇に潜むその姿を凝視しその人を認識して声をあげた。

「ま、牧！？いつからいたのさ？？」

藤棚のそばのベンチで寝そべってる人以外に人はいなかったって事はそれが牧だった…？

牧には私の問いには答えず櫻井しか見ていなかった。

牧は私達に歩み寄り、私を後ろから抱きすくめた。

「これ、俺の…結構…マジ。」

牧は私を抱きしめる腕の力を少しだけ強めた。

「遊びや妥協で相手されるほど安い女じゃねえんだよ…！」

牧の怒号が櫻井に浴びせられた。

初めてだった…牧が怒鳴るなんて…。

牧の声が全身にビリビリきた…。私だってビビってるんだ…矛先である、櫻井はもっとビビってるだろう…

櫻井は私と牧を交互に見て鼻で笑い、帰って行った…。それが彼にとって精一杯の虚勢だった。

「あの、牧…？」

私は恐る恐る、牧に声をかけてみる。  
すると牧はいつもの声で答えた

「ん？何…？日向」

私はホッとしながら言った。

「そろそろ…離してくれない…？」

牧はダダをこねるように言った。

「ヤーダ、もう少しこのままにいる。」

私は『しょうがないな』のため息を小さく漏らす。

「牧…ありがとね?…その…『遊びや妥協で』…ってやつ…。その場しのぎでも嬉しかったよ…」私は初めて牧に素直にお礼を言った気がする。

「その場しのぎじゃねーよ…ホントにそう思ってる。日向は安い女じゃねえよ…」

照れ隠しもなくサラリと牧は言った。

そこで私は、今まで思っていた事を牧に聞いてみようと思った。

「牧は、麻美ちゃんの事が好きなんだよね…?」

「なんで今麻美の話?麻美はカンケーねえじゃん…」  
はぐらかす牧に私は続けた。

「学の事、キライだって…いうのは、麻美ちゃんの事があったからでしょ?…牧が学にこだわるのは、麻美ちゃんの事がずっと引っかかってるからじゃない…?」

「だから、関係ないって!」

牧はちよつと苛立ちながら否定した。

それから少し間を置いて、牧に言った。

「麻美ちゃん、学と別れたって…」

私が言うと牧の腕がピクつと震えた。

「麻美が…学と別れた…?」

「だから、今だったらまだ間に合う。…麻美ちゃんに、まだ好きなんだって言ったら…?」牧からの返答はなかった。

信じられないと言った風に呆然としているようだった…。

「日向の…せいだ…」

私は信じられない言葉を聞いた。自分の耳を疑った…。

牧が私を責める事なんて今まで一度だってなかったから…。

牧は私を振り返らせ、私の両肩を掴んで揺すった。

「日向のせいだ！日向が学と…！」

そこまで言うとは牧は言葉を急に止めた。

「私が学と何だって言うのよ？」

私は妙に冷静に、冷たく牧に問う。牧はそれ以上言いたくないと言った表情をしていたが、やがて口を開いた。

「学が言ったんだ…日向と寝た…って…！だからちよっかい出すな…って…！」

私は動揺した。学はおしゃべりだったんだ…それを忘れていた…。

「だ、だけど、それから一度も会ってない！バイトで顔を見かける以外は…ホントだよ！」

牧は私の言う事に激しく首を振った。

私の肩から手を離し、ウロウロ歩き出し言った。

「あいつも言ってた『一度だけ』だって…でも」

牧は激しく動揺していて、全身が震えてた。怒りで…？

「『今までの女と別れて本気でひなと…』って…！あいつ俺にそう言っただよ…！」

「でも実際、それからは何もないじゃない…！」

私もイラだって声を荒げた。

私がそう言うとは牧は冷静になって考え出し、こう言った。

「そもそも、だ。なんで日向は学に抱かれた？」

そこまで聞いて、私は初めて牧の目が『ヤバイ』感じな事に気が付いた。ヤバイ…逃げないと、そう思っただけでも足がすくんで一歩も動き出すことができなかった。

牧は私の両肩を強く掴み、強く揺さぶった

「なんで学なんだよ！？なんで…俺じゃないんだ…？」

私は足がすくんで動けなかった。牧のされるがまま揺さぶられていた。

「俺じゃなくても良かったんだよ…！眼鏡のあいつだって、さっきのヤローだって、誰だって良かったんだよ！学以外なら誰でも…！」  
牧が何を考えているのか全然理解できなかった…。

学以外なら誰でも、良かった…？

「なあ！なんで学なんだ！？俺のどこが学に劣ってる！？

…教えてくれよ…教えてくれ…日向…なんで俺じゃダメなんだよ！  
！？」

牧は堰を切ったように今までの思いを私にぶちまけた。

不意にそんな私を揺さぶる手が止まった…。

私はこの時初めて自分が泣いてる事に気付いた…。

「わかんない…牧の言ってることが、難しすぎて全然わかんないよ…」

私が泣き出したことで牧は我に返り、私の体から離れた…。

牧が落ち着いた所で安堵の涙が追加され、本格的に私は泣き出して  
いた…。

「…つく、…う…ひつ く……う…」

私は、私の頭を撫でようと差し出した牧の手に『ビクッ』その身を  
震わせて怯え、牧は手を引っ込めた。

しばし静寂の後、牧は一言『…ごめん』と言って走り去った。

今まで一度も責められた事のなかった牧からの叱責のショックと、  
孤独感…

私はしばらくその場にしゃがみこみ泣く事しか出来なかった…。

## 第12話　好きだから信じられない…

「ひーどい顔…」

お客さんとして来ていた麻美ちゃんに容姿を指摘される。

「え。…そんなにひどい…？」

「ひーどい、ひどい…。志摩ちゃんの顔じゃないよ。

実際志摩ちゃんじゃないかと思った。」

麻美ちゃんはアッサリ言った。そして続ける…。

「目なんかボンボンに腫れて土佐犬みたいに腫れぼったいし…」

土佐犬…？

心配そうに私の顔を覗き込む。

「何があつたの？」

…ここで私が牧の名前を出せば麻美ちゃんは牧を責めるだろうし、

それは私の本意じゃないから…。

「たいしたことじゃ、ない…。麻美ちゃんにはわかんない事だし…」

「『わかんない事』でも話して欲しいな…聞く位だったら出来るのに…」

麻美ちゃんはすねた様に言つた後すぐ気を取り直して続けた。

「どうしても辛い時は言つてね…？」

私が頷くと麻美ちゃんは安心したように笑つて、帰って行つた。

その夜、店のお金を両替するため学が来た。

その時は丁度右京が休憩に入っていたため、私が両替をしなきゃならなかった。

「……元気だった？」

札を数えてる時は話しかけて欲しくないんだが…とりあえず私は頷いた。

「今日、バイト終わつたら会いたいんだけど、時間空けてくれない

？」

私は首を振る。

「…どうして？」

私は札を数える手を止めた。

「会いたくないから。…私が学と関わると嫌な思いする人がたくさんいるから」

私は自分の意見を言つて、再び札を数え始めた。

「そういえば…顔…すごいね。…泣いた？」

「……………」

札を数え終わつて私は学に言つた。

「麻美ちゃん…森繁さんの事フツたの…どうして？」

聞いてもどうしようもない事…どうしてだろう？聞きたくなつた…。

「ひなと付き合おうと思つたから」

学は真顔でそう言つた。

彼の、その言葉がどこまで本気なのか、よくわからない…。

前のように浮かれて傷つくのが怖かつた…。

「森繁だけじゃない…他の女たちとも別れた。」

「一方的に…？」

「でも、別れた。」

流れる空気が重かつた…。

学の事は好きだ。

『付き合いたい』

…本気でそう思つてくれるんだつたら嬉しくないハズがない…。

だけど、麻美ちゃんの事を考えると、昨日の牧の事を考えると、喜べない気持ちのほうが大きかつた…。

「バイト終わつたら外で待つてゐるから」

一方的にそう言い残して学は帰つて行つた…。

バイトが終わると学は本当に待つていた。

嬉しい…。



学が私の事待っていてくれるなんて夢にも思っていなかったこと。

1年前の、いや、数ヶ月前までの私なら、卒倒しているだろう…

学を取り巻く人の事、知らないままだったら素直に喜べたのに…。

私は複雑な気持ちで、学の顔をマトモに見れない…。

「ひな、もう全部終わったから…だから」

「全…部…？」

学は何のことを言っているんだろう…？

全部、何を終わらせたんだろう…？

「そう！全部だ、終わり…」

学は私に言い聞かせるように言っただけど、私はなんとなく納得できなかった。

「彼女達との関係の事…？会わないようにすれば終わった事になるの…？」

学は私の問いに、少し考えたあとでこう答えた。

「そんな事言ったらキリがないよ…」

……………。

キリがない…！？

キリがないようにしたのは誰？！…誰のせい？？  
自業自得でしょ…。

櫻井にだったら…いや、牧だとしても私はそう言っていた所だろう…

言えないのは相手が学だから…？好きだから？

私はそんな考えを振りほどくように言った。

「キリがないって何…？なにかの作業みたいな言い方しないで…」

「俺は…！」

一瞬、感情的になりそうな自分を落ち着かせて学は続けた。

「俺は、ひなの事を真面目に考えようと思ったから…だから」

「それはうれしい、うれしいよ？…うれしいけど…」

学の言葉を切り、話し出したけど、言葉に詰まる私。

学は私をなだめるように言った。

「別に女と別れる事を作業なんて考えてないし、キチンと理由も説明した。」

ちゃんと話し合って決めたと思ってるよ。

…ひなはさ、俺とひなが付き合うことで嫌な思いをする人が…って言うけど、それは俺だけに限った事じゃないだろ？」

そう言われて私はハツとした。

唯衣が櫻井と付き合うことで玲夏が傷つき、私も嫌な気分になった。

学は私の顔を覗き込んだ。

「…な？誰かと誰かが付き合うことで他の誰かが傷つく事なんてよくあることだ。」

それを怖がったら、一生恋愛なんてできないって！」

学に踏み出したい、飛び込みたいと思ってるのに最後の一步が踏み出せない。

「例え、それが友達でも…？友達が傷つくって知ってても…？」

私は救いを求めるように聞いた。

「それで、ひなから離れるんならその程度の繋がりではない友達ってことだろ…。」

友達の幸せを喜べないヤツが友達だなんて言えるのか？」

「……………」

それは、そうだけど…

学は露骨に苛立ち、深いため息をついてこう言った。

「…ここまでめんどくさい女、久しぶり…。」

悪かったね…。

石橋を叩き過ぎて渡る前に壊れるタイプなんだよ…。

「森繁が自分で言っただけだよ。『志摩ちゃんとなんかあったのか？』って…『志摩ちゃんは、潔癖で引っ込み思案な子だから学も誠意見せなきゃね』って…。」

潔癖で…引っ込み思案…

「そうそう…こうも言ってたなあ…『独りよがりで頑固』って…」

学は意地悪く笑うとそう言った。

潔癖で、引っ込み思案で、独りよがりな頑固……  
当たってる…。全部当たってる…

「だから、森繁の事を気にしてるんだっただ独りよがりな思い込み  
って事だ」

そう言っただけで学は笑った。

麻美ちゃんが私の事を応援してくれてる…？

考えたあの子はずっとそうだった…

いつも人の心配ばかりして、…学に私の携帯の番号教えたり…

…ライバルに協力するなんて…おかしいよ…変だよ…麻美ちゃん…

「学…」

つぶやくように名前を呼んで、学の顔を真っ直ぐ見た。

「私、学の事信じるよ？…いいの？それでも…」学は真顔で、でも  
優しく言った。

「良いに決まってるだろ！」

学はそう言っただけで二カッとした。

学のこんな風に笑う顔、私は初めて見た…

私はその時…確かに幸せだった…

学と付き合い出して2週間。何事もなく、平穏無事な毎日…

毎晩、電話はかかってくるし、会えるときは会ってる…

不満はない。幸せだと思ってる。

ただ、いつもなんか不安…

何が不安なのかわからないから気持ち悪い…

バイトの休憩中、唯衣から久しぶりに電話が来た。『ひなに話した

いことがあるから後で行く』

それだけ言って電話を切られた…。

私も学と付き合った事を言いたかったのに…。

今日は学はバイトが休みだったので、迎えに来てくれる約束だったんだけど…。

唯衣と学…鉢合わせちゃうな…ま、いつか。

バイトが終わって、唯衣は店の入り口の前で待っていた。

今日は櫻井と一緒にの日だったので桜井もいたのだが、お互い無視である。「ひな、自転車壊れたの？右京君にバイクで送ってもらうのかと思ったら櫻井だし。」

そういえば、右京の家に連れて行かれた以来、ゴタゴタして、唯衣と、ちゃんと話できてなかったつけ…。その日あったことも…。

私が口を開こうとした瞬間、唯衣が喋り始めた。

「あたしの話する前に一つ確認したいんだけど、ひな、もう片山の事はいいんだよね？」

「いいんだよね？…あきらめたんだよねって事かな？私の返事を待つか待たないかでの間で唯衣は再び話し出した。

「片山はね…やめな？悪い事言わんから！」

「あ、あのね唯衣」

「アイツはダメ！ひなが泣く事になるから！」

私に話す隙も与えずに学の事を喋りまくる唯衣。唯衣の勢いは止まらない…。

しょうがない…。唯衣の話が終わってから話すか…

「あいつは彼女がいる！そんなヤツ思い続けて何になる？

傷が浅いウチにあきらめな！あたしが男、紹介するから」

彼女…ねえ…。

私はどこか他人事のように唯衣の話を聞き流してた…

「細つい、小っちゃい彼女連れておとといだって…」  
「おととい…ねえ…」

え……っ!?

聞き間違いか、唯衣に訊ねてみる…

「いつ…だつて?」

「おととい」

間髪入れずに唯衣は答えた。

おととい…水曜日…。

…確かに水曜日は会わなかった。

先週も…水曜日はなぜか電話もかかってこないんだ…。

「………唯衣、その彼女つて…どんな感じ?髪型とか…」

呆然と唯衣に聞くと唯衣はちよつと考え込み答えた。

「髪型はロングでえ…でもあたし、あの人どっかで見たことあるんだよな…」

えーと…ん…?どこだっけなー?」

そこまで聞いて答えが分かった気がした。

なんだか力が抜けてっちゃって……。

私は脱力した声で唯衣の疑問に一言で答えた。

「みまストア…」

すると唯衣は思い出したようなスッキリした表情で叫ぶ。

「そうそう!みまストアの社員!

確かひなの憧れの…って、あれ?ひな、知ってたの??」

唯衣が私に言った時、学のバイクが私達のすぐ横に止まった。

「…誰?右京君?」

唯衣がわからないのも無理はない。

まさか学が私を迎えに来るなんて想像もしないよね…

学はヘルメットのバイザーを上げた。

唯衣はその顔を凝視し、驚く…。「げっ！片山！？うそおなんでも！？」

唯衣は私と学を交互に見てワケが分からない様子だ。

「ごめん、唯衣。隠してたわけじゃないんだけど…2週間前から付き合ってる」

私がそう言ったときの唯衣の顔、おもしろかった…。

唯衣は友達だから唯衣の言ってる事、信じたいけど…。

女にだらしなかった学が、「女とは別れた。全部終わった」って言った、その言葉も私は信じたい。

「学…聞きたいことがあるの…。正直に答えて…」

顔からは表情が消え、感情を込めず早口に言う私に、学は頷いた。

「福井さんとは、まだ続いているの？」

私のその言葉に学は少しだけ動揺した。

私は学の態度で確信し、唯衣はそんな学を蔑むような目で見ていた。「学って、ウソつかない人だと思ってた…。去年の冬、『彼女いますか？』って聞いた私に『いない』って答えなかったみたいに、ウソだけはつかないと思ってた。」

ホントに…

信じた私がバカだった…

私の様子を察した学が唯衣に言う。

「月島…おまえ、帰ってくれる？ひなと二人で話したいんだ…。」

そんな学の申し出に唯衣は

「はア！？ひなだけなら言いくるめて丸く治めようとか思ってる？？」

と率直な言葉を学にぶつけた。

言いくるめられる…か。確かに舞い上がった時だったらすうかもね…

だけど、学の話も聞いてみたい…。どんな…話なのか…

「ごめん、唯衣…私なら心配ないから…帰って…？」

私の言葉に唯衣は素直に頷いて、仕方ないように言った。

「ひなが、そう言うなら行くけど…。何かあったら言ってね？」

私は学を見据えながら頷くと唯衣は帰って行った…。

唯衣がいなくなった後、しばらく無言の状態が続いたけど、

私とその状態に耐え切れず口を開いた。

「学、言っただよね、『女とは別れた、全部終わった』って…私、甘かったのかな…。学はウソは言ってない。

私がまた都合のいいように解釈したんだよね…？

学、『全員別れた』…なんて一言も言っただよね？…ふふ…日本語ってむずかしー…」

嫌味じゃなくて、ホントに可笑しかった。

人間は…特に恋する女は自分の都合の良い様に解釈するものだ…。好きな男に言われたなら尚更…。良い様に信じなくなるものだ…。

「学の言った、『全部終わった』は別れた女とは全部終わったって事だよね？」そう言っただけ私を悲しそうな顔で黙って見ている学…。

「…？なんでそんな悲しそうな顔してんのよ？『一本取られた』って言っただけだよ。」

もつと『してやったり！』みたいな顔しなさいよ…！」

自分でも壊れてきてるのはわかってる。

だけど、笑わないとやってられない…！！

「ひな…」

なだめるように学が私の腕を掴む…

「いやだ！触らないで…っ」

ダダっ子みたいに言っただけで学の腕を振り払って、現実に戻された。「どうしてよ…？何でそう中途半端なことするの…っ？」

「中途、半端…？」

この言葉に学も力チンと来たようだったけど、私は構わず続けた。

「確かに独占したくなるとは言ったけど、福井さんとの関係が続いてるなら、

「なんにも麻美ちゃん達と別れる事なかったのに！！」

そう言った時、牧が学にこだわるのってこういう感じなのかな……？  
 って思った。この人にだけは負けたくない……変なライバル意識みた  
 いなもの……。勝てないの、わかってるのに……

学がようやく私の両肩を掴み、真剣な表情で言った。

「聞いてくれ……？話すから」

学の真剣な声に私は言葉を失った。

言いたい言葉がたくさんあったはずなのに……全部忘れた……。

「美咲とは…別れられない…どんな女と別れても、美咲とだけは…」

ここまで…アツサリとお前の負けだみたいな言い方されると…。

逆に気持ちいいかも……

…なんてウソ。敗北感でいっぱいだ…。

私の様子を見て、学はあわてて言った。

「恋愛感情があるわけじゃない…。ただ、俺のせいであいつの人生狂わせた」

○

なんて言うか……

なんなのよ？その言い訳って…思った…。

昭和の時代のドラマとかにありそうなセリフ……瞬櫻井の顔が浮かんだもん。

……もつとマシな言い訳はなかったのかな？

私は深いため息をついた。

「ひな、疑ってるの…？」なんと言うか…疲れて返事をするのもだ  
 るくなつた感じ…。



「信じる、信じないより…冷却期間を置こう…？」

…わからなくなった…。自分の気持ちも、学の気持ちも…。

学が…私の事、好きかどうかも…」

少なからず学は動揺していた…。

「なんで…？俺の気が持ちわからない…って？」

「『言わなくてもわかる』って思ってる！？そんなわけないじゃない！いつも不安だったよ！

学、一度も好きだって言ってくれたことなかったし…！」

涙ぐみ、言った私の言葉が学を黙らせた…。

好きだから、信じたい。

好きだから、信じられない。

どっちも私の、ホントの気持ちなんだ…

### 第13話 身近な非現実

学と冷却期間を置いて、1週間が経とうとしていた。

そんなある日のバイトの帰り、店の前に見知らぬ女性が立っていて、呼び止められた。

「志摩さん、だったよね…？」

…あなたは誰ですか？

知らない人に待ち伏せされるのは牧で慣れていたとはいえ、あまり気分のいい物ではない…。

私が尋ねるより先に彼女が答えた。

「私は、吉野。吉野悠宇…」

学くんの彼女の友達。…あなたに話があつてね…」

よく考えたら彼女の顔には見覚えがあつた。

確か…よく、福井さんと一緒に買い物に来てた友達…？

いつも私に攻撃的な視線を投げかけてきてたっけ…？

その友達が、私を待つてたんだ。目的は言われなくても分かる…。  
だけど、腑に落ちない…。私は吉野さんに訊ねた。

「話の前に…一つだけ質問があるんですけど、…いいツスカ…？」  
ピリピリし始める空気の中、吉野さんが頷く。

「今日、あなたがここに来る事、福井さんはご存知なんですか？」

知っているなら…

なんで『学の彼女・本人』が来ないんだ？と思う…。

知らないと言うなら…

「美咲は…知らないわ」

…話は早いよね…？

「あなたが、私と話して何になるんですか？失礼ですけど、あなたには関係ないでしょ？」

妙に落ち着き払った私の話し方が癪に障ったようだった…。

「勘違いしてるようだから、これ以上増長させる前に教えてあげようと思って」

あー…ご親切に忠告しにお越し下さったのね…。

聞きましょう…？

「学くんは美咲とは絶対に別れないわよ？絶対に！」

その話は前に学から聞いたな…。

もしかしたらこの人から何か聞けるかもしれないな…

この手のタイプは気分が乗ったら勝手に喋り出す。だから、私から聞き出さなくても…。

「学くんとはもう、寝たの？」

なんだ！？この女…

そんなことお前に話す理由なんかないだろ！！

何の脈絡もなくそんな事を聞いてくる吉野さんに私は素直にムカついた。

そんな私に構わず吉野さんは続けて言う。

「まあ、学くんが相手なら寝て当然、か。」

人をカラダしか撮り得がないみたいな言い方…。

「気をつけたほうがいいわよ？妊娠させられても責任は取ってもらえないから」

押し黙る私に得意げに話す吉野さん。

「美咲は、学くんのせいで子供が産めない体になったのよ」

……。

この間の学といい、この人といい…

もう少しマトモな話はできないんだろうか…？

『人生狂わせた』だの『子供が産めない体になった』だの…

「まあ、よくある話よね？失敗して、妊娠して、墮ろして…子供が産めなくなる。女だったら分かるでしょ？どんなに辛い…美咲はこれから先、結婚しても好きな男の…子供を産めないの」

「……。」

子供を産めない女の気持ちは正直言っただけわからない。

ただ、辛いだろうな…って同情の気持ちはある。

「学くんが失敗して妊娠させたばかりに、美咲の人生台無しになった…。」

学くんには責任を取ってもらわないと…美咲の一生分の責任を」  
それって…なんかちよつと違う気がする…。

これまで黙って話を聞いてたけど、ちよつと言いたくなってきた…。

「かわいそうだね…」

私の『かわいそうだね』に勘違いして、吉野さんは乗ってくる。

「でしょ？あなたならわかってくれると思ってた！子供を産めないっていうのは…」

私はすぐに彼女を遮った。

「違う。…そんな考え方しか出来ないのがかわいそうって言うてんの…」

私の発言に彼女の表情は凍りつく。

私は構わず続けた。

「子供が産めなくなつたからって、人生台無しだ。…なんて誰が決めた？福井さんがそう思ってるかどうかなんて本人にしかわからないでしょ！？」

吉野さんは全身をわななかせて怒鳴ってきた。

「何言っただのよ！好きな男の子供を産めないなんて、人生、台無しにされたようなもんでしょ！あんたそれでも女なの？」

……。

女ですが、何か…？

子供を産めなくても好きな人と結婚して、幸せに暮らしてる人だっている。

強く生きてる人だっていっぱいいる…。

『人生台無し』だなんて、他の子供が産めない体の女性にだって失礼だ…。被害者意識、丸出しで、学を繋ぎとめて置きたいだけじゃないのか…？？

そもそも、失敗したのは学だけの責任なのか？

女はただの被害者みたいな言い方も癪に障る。

いや、ホントに福井さん自信がそう思っているのかは不明だけど…

なんだか…この人と話す事に冷めた…。

「あなたと、話しててもしょうがない…友達だとはいえ、なににもかも、それこそ、男とベッドにいる時の事まで知ってるわけじゃないでしょう…？」

話を切り上げられる雰囲気を持って行こうとした時、彼女は食い下がった。

「何余裕ぶってんのよ！？学くんがあんたみたいのを本気で相手にすると思ってるの！？」

「……………」

挑発してるのかなんなのか知らないけど…

なんかマジで…

この女鬱陶しい…

私はつい思った事が口に出てしまった…。

「福井さんに黙って私の所に来る事自体…『勘違いした友情』…ってヤツ…？」

この言葉がかなりヒットしたようでカツと目を見開き私を睨むと掌

を振り上げた…

こういう時ってなぜかスローモーションに見えるんだ…

ああ…これは当たったら痛そうだ…とか、今の内に歯を食いしばっておこう…とか、なぜか冷静にそんな事を考える…。

まあ、よけても間に合いそうにないし…。  
瞬間、目の前が真っ暗になった…。

バシィ！！

派手な音が響いた…でも、痛くはなかった。

それもそのはず…吉野さんの手が振り下ろされた瞬間、

私たちの間に割って入ってきた人が居た。

「いやあ…あ！牧くん！？ウソオ…」

牧が私をかばうようにして間に入り込んだので、吉野さんの手は牧を殴っていた…。

ただ、彼女の方も、予想もしない角度からの平手打ちだったため、親指の付け根辺りを強打したようで、それも痛そうだ…。

「やだあ…牧くん、なんで入ってくるの…？？ヤダ、口切れてる…腫れちゃう…」

ホントにパニックなのか、男の前だと態度が変わる人なのか…

動揺し、うるたえる吉野さん…。

私は吉野さんをやりわり押しのけ牧の顔を覗き込む。

ウェットティッシュを取り出して牧の口を流れる血を拭きながら言  
った。

「…ごめんね。痛かったでしょ…？」

感情はあまりこもってなかった…。ホントにビックリしてたから…。

「あ…も…」。いい男が台無しだ…。

そう言って私が笑うと

「これでやつと普通レベルに、なつたろ？」

牧は白い歯をニツと見せて笑った。

そんな私達を吉野さんは信じられないような物を見るように見ていた…。

やがて真顔になると牧は吉野さんを振り返り、

「吉野さん、俺…日向と二人で話、したいから…」

そう、牧が言うと吉野さんは何か言いたそうだったけど牧の言葉に無言で頷き、最後まで私に挑戦的な視線を向けて立ち去った。

「ごめんね…痛かったでしょ…？っていうか、なんで…いたの？」

「友達ン家の帰り。偶然、二人が言い争ってるのが見えて、自転車止めて、二人ににじり寄ってんのに、二人とも気がつかねーの…」  
そう言って牧は笑った。

そりゃ…白熱…してたし…？

「あの人、知り合い？」

牧とあの人、親しげだったから…

「美咲さんとは家が近所で、小さい時とか遊んでもらってたし、あの人は福井さんが高校の頃からの親友らしい。…親しくないって言えば親しくないし、親しいって言えば…そうだな…」

自分で聞いておいて、『あ、そうなんだ』しか言えなかった

「だけど…な…んで、入って来るかなあ…？」

もちろん、私をかばってくれたのはわかってる。

でも、この間はあるなに怒ってたのに…

見て見ぬフリ位、してもいいのに…

牧は真っ直ぐ前を見て、私の顔を見なかった…。

「……。罪滅ぼし」

牧は言って私を見た後、すまなそうな顔をした。

「この間は、悪かった…。」

私はそれには返答せず、

ほんの少し恨み言を言ってみたくなった。

「ショックだった…うん、ホントに、ショックだったよ…。牧に責められた事なんてホントに一度も無かったから、ほんとにショックだった…」

思い出したように言って、牧の反応を見る…。

オイ…、

本気で落ち込んでる…？

私は慌てて言った。

「ああ、でも、牧がそれだけ麻美ちゃんの事が好きで大事に思ってるってのはわかった！」

私にそう言われて牧は少し考え込んだ。

「…確かに大事だし、好きだよ。ただ…付き合ってた時みたいな感情じゃ、ないんだ。」

なんか危なっかしくて、心配でさ…。」

「キスしたいとか、抱きたい…とか思わないって事…？」

私は言って、牧と目が合って反射的に逸らした…。

そんな私に牧は笑った。

「なんもしねーよ…。ビビんなくて！」

この間の事がかなり堪えてて…

反射的につい、ビビってしまう…。

「この間は、ホントに悪かった…。反省してます。」

牧は私に深々と頭を下げた。

「いいよ、もう。…私も今日も助けられちゃったし…。」

私はカバンからメモ用紙とボールペンを取り出し、しばらく無言で書き込んだ。

「ハイ、私の携帯の番号。」

私は牧に携帯の番号を書いたメモ用紙を差し出した。牧はじつとメモ用紙を見つめて動かなくなった。私は牧に言った。

「…信用してあげる。」



「俺の事…信用して、くれる…のか？」

いつまでも受け取ろうとしない牧に私は言った。

「…ごめん。…いらなかった…よね…？」

私は急に恥ずかしくなった。

…牧が私の電話番号を知りたがっていると

勝手に思い込んだ高慢な態度が恥ずかしかった。

私はメモ用紙を引っ込めようとすると、牧は慌てたような声を出して私の手を掴んだ。

「…あり、がとう…」

牧はずっとうわ言の様につぶやいていた…。

季節はもう、すっかり秋になってしまった…。

「アタシの誕生日、もうすぐだからプレゼント、期待してるよ！」

久しぶりに麻美ちゃんが会いたいと言うので公園で会う事にした。

「何がほしいの？」

私の問いに麻美ちゃんが元気に答える

「ピアス！…志摩ちゃんのセンスで！」

「えー…？？私、センスないからなあ…」

私が笑いながら困ると

麻美ちゃんがいきなり真面目な顔になって私のほうを向いた。

すごく不安そうな顔…麻美ちゃんのそんな顔…初めて見た。

「麻美ちゃん？…どしたの？」

私が声をかけると麻美ちゃんは私に問いかける

「志摩ちゃん…あたし達って、友達だよな？」

予想外の質問…。ある意味深いけど、今更な質問でもある…。ただ、思いのほか麻美ちゃんが真剣な顔をするので私は戸惑いながら答えた。

「友達…だよ？…少なくとも私はそう思ってるけど…」

麻美ちゃんは私の返答だけじゃ満足いかないのか、再び問いかけてくる。

「ずっと、友達だよね？いきなり会えなくなったりしないよね…？」

「ええ…っ！？」

麻美ちゃんは一体何が不安なのか良く分からないけど私は思った事を口にした。

「ずっと、友達だよ…？例えば、麻美ちゃんが地方に就職したとしてもずっと…」

戸惑った。こんな弱気な麻美ちゃん見たことなかったし…。

麻美ちゃんはようやく納得して、ニコツと笑った。

「志摩ちゃんは、自分の事だけ考えてればいいんだよ？」

誰かの事気にしたりして、学から離れたりしたらダメだよ？…あとさ、牧の事もお願いね…。」

なに？…なに？…？私は麻美ちゃんの言葉に強烈な違和感を覚えていた。

なんだか、もう会えなくなるみたいな言い方…。

引越ししちゃうとか言わないよね…？

だけど、その言葉を口にするのが怖かった。

麻美ちゃんが遠くに行くなんて考えもしなかったから…。

「麻美ちゃんホントにどうしたの？なんかあったの…？今日は変…」

「そう…かな？…えへへ、そうだね…。どうしたんだろうっね…？？」

じゃあ今日はこれから学校の友達と約束してるから！…じゃあね、志摩ちゃん」

そう言って別れた。

それから1週間、毎日何事もなく過ぎて行っった…。

唯衣は長年、片思いをしていた瀬戸君と晴れて付き合うことになって、

構ってくれなくなつたし…。

最近、学はもちろん、牧や、麻美ちゃんからの連絡もない…。  
そんなある日、家の近くで制服姿の牧を見かけた…。

なんだか忙しそうで、声をかけてもいいものか悩んだが、  
声をかけてみることにした。

「よー。牧ー！」

牧は私に気付いて近づいてきた。でも、そこに笑顔はない。

「なんか…顔色良くないね？…なんかあった？」

私が顔を覗き込むと、

今にも泣き出しそうなのをグッとこらえる牧の顔…。

私は牧の様子にぎよっとした。

「……ね？牧？…どうした？…？」

私は慌てて牧に問いかけた。

牧は、答えた。

「麻美が轢き逃げされた」

……なんて言つたのか、よく聞こえなかった  
いや、理解できなかった…。

「え……っ！？」

私の問いに答えることなく牧は続けて言つた。

「轢き逃げされて…発見が遅くて…意識が戻らねえ…」

ガクガクと震えながら牧は言つた。

私は、命があつたことを聞かされて安堵した。

意識がないのは不安だけど、でも、生きていてくれて良かった…。

「これから…麻美の所行かないと…。俺が行つたって何もできない  
けど…そういうことだから…」

急ぐ牧に追いつがるようにして私は言つた。「私も…っ！私も連れ  
てっ！…お願い」

「行つてもしょうがないって…！あいつ、意識がないんだ…あんな

あいつ…日向は絶対にショックを受けるよ…。」

私を突き放すように言う牧に私は何度も言った。

「お願い…牧…。私、麻美ちゃんの近くに行きたいよ…」

言ってもムダだとわかったのか、牧は私を病院まで連れてきてくれた。

麻美ちゃんのお母さんは、毎日、寝ないで麻美ちゃんに付きっ切りで、貧血を起こし倒れ、今、処置室で点滴を打ってもらっているらしい…。

病室に入って、ベッドを見ると…

体のあちらこちらに包帯を巻いた麻美ちゃんの痛々しい姿があった…。

麻美ちゃんの体には色々な器具が取り付けられていて…。

「だから、言っただろ…？元気に跳ね回ってる麻美を知ってるヤツなら誰だって…やりきれねえよ…」

牧は涙ぐむ。

「そばに…行ってもいいかな…？手を握ってあげたいの…。」

牧は鼻をすすり私を促す。

私はそつと麻美ちゃんの手を握った。両手で包み込むように。

「麻美ちゃん、もうちょっとで誕生日なんですよ…？」

こんな所で寝たまま過ごしているの？私ね、ピアス、買ったよ…？麻美ちゃんに似合いそうなもの探した。麻美ちゃんの喜ぶ顔見たくて、

一生懸命選んだよ…？」

いくら私が話しかけても麻美ちゃんからの返事はなかった…。

それでも私は話かけたかった。

「ずっと友達だよ。約束したよね…？」

…だから、私の話を聞いて…？…私を見てよ…。お願いだから…麻美ちゃん…！」

私を見ていたたまれなくなったのか、牧が止めに入る。

「もう、やめな日向。いくら呼んでも麻美は」

！！？

「ま、牧、見た？…今…」

「え…？」

！！！！

「あ……。」

麻美ちゃんの手が微かにだけど、私の手を握り返した…。

「み、見たよ！見た、見た！て、て、手が…麻美！」

私達は揃って麻美ちゃんの顔を見た。

目尻から一筋の涙が流れていた…。

牧は大急ぎでナースコールを鳴らし、私達は再び麻美ちゃんに語りかけた…。

## 第14話 慟哭

あれから1週間：

牧とは頻繁に連絡を取ってる…。

って言っても、受け取り専用なので牧からの電話待ち。

麻美ちゃんの容態は一向に回復しないようだ…。

近い内にまた麻美ちゃんに会いに行く事にする…。

行っても、結局なんにもできないんだけど…。

約1ヶ月ぶりに学から電話が来た。

『森繁が事故つたの…知ってる…？』

「うん…轢き逃げなんですよ…？」

言った後、重い空気になった…

『その、犯人、捕まった事は…知ってる？』

犯人…？捕まったんだ…

『恩田が言ってた。…けどそれ以上は教えてくれなかった』

私、頻繁に連絡取ってたのに…。牧は教えてくれなかった…。

『ひな…。あのさ』

「今度の日曜、麻美ちゃんの所に行くんだけど、学も一緒に行かない…？」

『え…あ、いや、』

学の返事はなんか気が乗らなそうだ。

「わかった、じゃあいい。それじゃあね…。」

隙を与えたら『別れよう』って言われる気がして、私は急いで電話を切った。

しかも、あれから初めての電話がこんな暗い話題か…。

麻美ちゃんが早く元気になって、それが話題になるといいのに…。

日曜日、昼過ぎに牧と麻美ちゃんの病院に行く約束をしている。  
待ち合わせは近所のバス停。

なのに、牧は来ない…。

何度バスを見送ったことだろう…？

一人で行こう。何度も思ったけど、行き違いになったらヤダから待った…。

牧のくせに~~~~~(?!)

約束すっぱかして何やってるんだろう…？もしかして先に行った？  
私はとりあえず牧の家まで行ってみることにした。

呼び鈴を鳴らしても誰も出てこない…

行き違いになった…？私はバス停まで引き返そうと思った…。

「よーよー！」

家から声がする…。上を見上げると二階の部屋から牧が顔を出している。

牧の顔を見た瞬間、怒りがこみ上げてきた。

「何してんのよ！？約束の時間からもう3時間も待ったんですけど！」

私が言うと、牧はだるそうにこう言った。

「あー…約束してたっけ…行くの？」

その態度が私の怒りに拍車をかける…。

「行くの？じゃないよ！行くから3時間も待ってたんでしょーが！」

牧は私の言葉に動じることなく返事をした。

「わかった、わかった…。支度するから、家に上がって待ってるよ」

私は怒りが収まらず、鼻息を一回吐いた。

「おじゃましてーす…。」

私が玄関を見渡すと牧は部屋から私に言う。

「おーい。今、家、誰もいねえんだ。自分で上がって来いよ」

「ハイハイ。」

私は怒りが収まらず大きく鼻から息を吐いて、階段を上った。

「こつち」

私は声がした部屋のドアを開けた。

牧は窓際にあるベッドに腰かけて外を眺めていた…。

ほくお？3時間も人、待たせてた割には随分、優雅に過ごしてたのね…？

「……何怒ってんだよ……」

「怒るよ普通！行きたくないなら、行きたくないで連絡くれてもいいのに！」

牧がダラダラやってんの知ってたら私、一人で行ってたよ！」  
私の本気で怒ってるのに、牧は弁解するどころかだるそうだ…。

「ムダだよ…行っちゃって…」

ずっと、眠ったままだからって…意識が戻らないからって…  
投げやりになる気持ちはわかるけど…

「牧…そんなこと言わないでよ…麻美ちゃんは…」

牧はあきらめたように言葉を吐き捨てた。

「死んだよ……」

何言ってるんのこの人…？

血の気が失せていくのが自分でもわかった…。

冗談にしては笑えない…。胸の底から気持ち悪い何かがこみ上げて



きて…立ってられなかった…。私は膝から崩れ落ちた…。

「ウソだ」

私はゆっくり首を振った。  
信じたくなかった…

「ウソじゃねえ…」

牧は冷淡に言った。  
信じられなかった！！

ウソだ、ウソだ、ウソだ、ウソだ！ウソだ！！

「ウソだ！そんなの絶対信じない！！」

「ウソじゃねえ！！！！」

牧はその場から動かず、取り乱す私を一喝した。  
その後、少しして牧は私に言った。

「日向には言わないでおこうと思った。言えば…俺と同じ気持ちになる。」

牧は表情を崩さず静かに言った。

私はその顔を見てちよつと怖くなった…。

まるで仮面みたいだったから…

顔の作りが端整なだけに、それが余計に…気持ち悪かった…

「麻美ちゃ…は…いつ…？」

私は自分が気付かないうちに泣きじゃくっていた。

「月曜日…」

月曜日…今日は日曜だから…ほぼ1週間…？

「1週間…？1週間も知らなかったの…？私だけっ！…私だけ知らなかったの！？」

牧は小さいため息をついた。

「学が連絡してくれてるもんだと思ってた」

あの、ぎこちない話し方は…この話をしようとして…？

「学…、っ犯人…捕まっ、たって…」

「…未成年だって、さ。俺らと変わらない年齢…。友達と出かけた帰りの麻美をナンパしようとして声かけて、シカトされたのに腹立って、車で煽りまくったんだって。」

私は牧の言葉を黙って聞いていた。

「疲れたところを、ちよつとぶつけて悪戯するつもりだったのが、強く当たって…。…怖くなって逃げ出したんだと」

悲しみと怒りで…

頭がおかしくなりそうだ！！

牧は突然笑い出した。

「許せないよな…？けどさ、犯人は未成年なんだよ。『将来ある有望な、なんたら…』」

とか言って…罪もチャラみたいなものだろ…。」

悪戯目的で、殺意がなかった未成年…？それだけで、麻美ちゃんを殺した罪が軽くなるの…？人殺しに『将来』も『有望』もないよ！

麻美ちゃんの『将来』を返してよ！！

頭が痛い…。

人間、泣きすぎると、頭が痛くなるんだ…。

目も、何もかも焼け落ちてしまうそうなくらい熱かった…

「一気に色んな事実知ると…キツイだろ…？

でもさ…俺、日向がうらやましいよ…。

そんな風に感情をすべて涙にして流せるから…。

…俺、涙一滴も出ないんだよ…」

悲しいときに泣けないのは…心の底から悲しいときだ…。私みたいに泣けるのはまだ、幸せなんだ…。

涙がすっかり引いてしまった…。

私が声をかけ、近づこうとした時、牧は言った…。

「俺…、どうしたらいいんだ？」

牧…目が私を捉えてない…いつだっただろう…？

前にもこんな事があった…。

麻美ちゃんが、学と別れたのを牧が知ったとき…。その時みたいだった…

「俺も、死ねばいい…？ここから飛び降りたら…死ねるかな…？」

瞬間、牧は私に掴みかかり、強く揺さぶる…

「なあ？俺はどうすればいい！？なあ！もう麻美はどこにもいないんだ…！」

今の牧はさっきの私…。

牧も…1週間経ってやっと自分の感情を吐き出してるんだ…。

私はしばらくされるがままに揺さぶられていた…

…牧の辛さがわかるから。

やがて、私の体から離れ、カッターナイフを手にし、  
自分自身に刃を向けた時に本気でヤバイと思つて牧を止めた。…が、  
暴れる、暴れる…女の力で、本気の男を止めるのは無理に等しい！  
牧の持つカッターナイフが私の胸をかすった。

「……っ…っ！」

一瞬、我に返り牧の動きが止まった…。  
私はすかさず手の甲で牧の頬を払った。

「生きてる人間が命粗末にして、そんな事して麻美ちゃんが許すと思つてんの！？」

必死だった…。勝手に体が動いて、自分が怖かった。牧が呆然と立ち尽くす…。私は牧からカッターナイフを取り上げ、ゴミ箱に放った。

牧の両肩を掴み力の限り牧の体を揺さぶった。

「牧、牧！！見て！私を見なさいよ！！」

取り乱した人を元に戻すにはこうするのが一番だと誰かが言っていた…。

「…日向……」

「良かった…ちょっと心配な取り乱し方だったから…」

安心したら…。急に傷口が痛み出した…。

切れ味の素晴らしいカッターだったのか、

牧の力が凄まじかったのか…

よく見たら私の胸、血だらけです。

ま、命に別状ないでしょう…良かったー！ムダに脂肪があつて…（？）

ブラの部分をかすってたら無傷だったのに。と、思うけどね…。

「きゅ、救急車…」

男は血を見ると動揺する生き物…。

牧も例外ではなかったようで、胸から血を流す女を見てかなり動揺する。

「いいの！大丈夫…かすただけだから…。牧は、自分の事だけ考えればいいの！」

でも…服、貸してくれる…？この格好じゃ、さすがに帰れない…」

服の胸元はさつくりと切れていて、血に染まっている。

こんな姿を家族に見られたら…変な誤解をされてしまう…。

牧は頷きタンスから自分の服を出し、私に手渡すと再びベッドに座り込んだ。

今の牧はポーズとしていたから、…私の事を見てないようだったから、牧の前で着替える事にためらいはなかった。

傷口からの出血はほとんど止まっていて、血が乾いて、固まっていた…。

私は素早く牧の服に着替え、最後のボタンをかけ終える時、牧は言った。

「……………なんにも…する気が起きないんだ……………からっぽ…希望が無い…生きてるのが虚しい…苦しい……………」

生きている者が命を持て余す事は死んだ者にとって失礼なこと…。

だけど、死んでしまった者が大切であれば大切であるほど、

自分の中で大きな存在であればあるほど、心に開いた穴は大きい…。牧がどれだけ麻美ちゃんのことを大切に思っていたのかがわかる…。

私は牧の前に立ち、言う。

「わかるよ…。私なんかより、牧の方がずっと苦しいよね…？ずっと一緒だったんだもんね…」

牧は、私の顔を見上げた。

目が合った瞬間、牧は私に言い聞かせるように言った。

「日向…もういいから…帰れ…」

私が帰った後に、変な気を起こされても困る、私は首を振った。

「俺、変な気、起こす前に…帰ってくれ…」

「…私が帰ったら、誰が牧を止めるの？」

ついに耐えかねた様に牧は怒鳴った

「俺がお前に変な気、起こす…つつてんだよ…！」

俺が本気でお前に襲いかかったら…お前の力じゃ止められねエだろ！

…止められねえよ…」

そんな事、今、牧に言われるまで全く考えもしなかったんだ…。

私は、どうしてだろう…？そんな牧を突っぱねて逃げようという気が起きなかった…。気が気が付いたら私は牧を抱きしめていて…

「牧、大丈夫だよ…」

今、成り行きで突っ走ったらきつと後で後悔する…。

だけど…この状態の牧を見捨てるくらいなら、

後の後悔なんてどうでもいい気がした…

牧は私の予想外の行動にしばし固まる。

私は牧から体を離すと、自分から牧に口づけてた…。

牧は力任せに私を抱きしめ、私の体をベッドに横たえた…。

ベッドから抜け出し、服を着る私に牧はつぶやいた。

「……………すまない」

私は驚き振り向くと、ベッドから身を起こした牧は言った。

「こんな……………俺……………日向に……………こんなひどいこと……………俺……………こんな事するつもりじゃなかったんだ……………」

牧は、さっきまでの行為を後悔するように自分を責めた。

「ごめん……………ホントに……………ごめ……………」

牧はベッドの中で頭を抱え込み、体を震わせて泣いた。

私は牧に近寄り、顔の高さを牧と同じにするようにかがんだ。

「……………私の事で、自分を責めて泣いたらダメだよ……………」

私、『ひどいこと』なんてされてない。

さっきの事は『必要なこと』だった……………。

牧だけじゃない、私にも『必要』だった……………」

『必要』だった……………。

それは牧に言い聞かせた事じゃないのかも知れない……………。

私自身に言い聞かせた事だったんじゃないのかな……………？

なんだかんだ、理由をつけて、牧を利用したのかも知れない……………。  
わせるために……………

利用したのは私の方だったのかもしれない……………

私は、ずるい女だ……………。

第15話 気持ち痛い…

『後悔しない』なんて思わなかったわけじゃない。

絶対『後悔する事』はわかっていた…。

だったら、私…どうしてあんな馬鹿な事をしたんだろう…？

牧を助けるため？

麻美ちゃんがなくなった悲しみを忘れさせようとしてた…？

私に、そんな力なんか、あるわけないのに、いい気になって…。

弱い人間が、人を救おうなんて、考えるからこうなるんだ…

私は、3日経った今も、考えても仕方ない事ばかり考えていた…

夢だったと考えられればいい…

だけど、麻美ちゃんはもういない…。

癒え始めてる胸の傷が、夢じゃないと言っている。

牧のことは好きだし、信頼もしてる。

だけど、それは学を好きな気持ちとは全然違う。

…あくまで『大切な友人』として…。

それをハッキリと気付かせてくれたのは学からの電話だった…。

『今から会いたい』の学の電話に『嬉しい』と思いながら、

罪悪感でいっぱい…

同時に学が好きなんだと感じるんだ…痛いくらいに…

私は学の元へ向かっていた。

待ち合わせは学の家近所の公園…。

麻美ちゃんと会う時はいつも利用してた公園。

学の家泊まったあの日から私は学の家に行く事を避けていた。



学の元へ向かう途中、牧と会った。

お互い、一瞬歩を止めた。

しかし、お互い言葉を交わすことなく牧が歩き始め、私の横を通り過ぎた。

その時私は例えようも無い淋しさを感じた。

考えてみれば、最初は牧の事、大嫌いだった。

何考えているかさっぱりわからなかったし、不信感でいっぱいだった…

私の周囲から消えて欲しいとさえ思っていた。

麻美ちゃんが現れてからだ…牧と色々話して、わかっていった…。信頼できて…。

だから…麻美ちゃんがいなくなった今、

私と、牧の関係も終わってしまったんだ…。

公園に行くとは学はベンチで待っていた。私は学の横に座った。しばらくの沈黙の後学が話し出した。

「会えない間、ずっと考えてた…。」

会わない間…すごく長かった。

色々な事がありすぎたけど…。やっぱりすごく長かった。

「俺はずっと、ひなの事ばかり考えてたよ。」

そう言つて、学は私を見た。

「寝ても醒めてもひなの事ばかり…バイト中でも…。こんな事今までなかったのに…」

嬉しい事を言われてるのに…私の心は複雑だった。

「俺、わかったんだ…。俺は、やっぱりひなの事…ひな ひなが…」  
学の口から大事な事が発せられるという、大事な場面で私の携帯が  
なった。

今日はせっかくの休みで、しかも学と会っていて、

『バイト、替わって下さい』なんて言う電話なら出たくなかった。

「……出ないの？」

学が不思議そうに見ている。

仕方がないので電話を取ってみる…。

『…俺』

私が電話に出るなりそう言って来た…。

『牧…さっきは、ごめん。いきなりだったらビックリして…顔合  
わせにくかったし…』

「別に、気にしてない…」

『傷は…痛む？化膿とかしてない…？』

「平気、気にしないで…」

近くに人がいるからだろうか…？

妙にそつけない口調になってしまうのは…？

『日向、俺、大丈夫だから…。なんていうか…うん、大丈夫だから』  
そう言つて牧は一方的に電話を切った。

「……牧」

「恩田？あいつ…なんだつて？」

「『俺は大丈夫』だつて…」

私はそつけなく言つて、暗くなる様子を学は察したのだろうか？  
妙に明るく振舞つて、私に言った。

「今日、家に誰もいないんだ…。…………泊まる？」

私はゆっくり首を振る。

私の胸には隠せない傷がある…。

学には見せられないよ…こんな醜い傷なんて。

「そっか…」

学はさみしそうに言った後、気を取り直してこう言った。

「ひな…渡したいものがあるんだ。」

そう言つて、ポケットから包装された箱を取り出した。学は私にそれを手渡して言った。

「開けてみて」

私は学の様子を窺いながら恐る恐る包みを開けた。箱の形状からも推測できたんだけど、箱の中身は…

指輪だった…。

…すごく、高そうな…

私は箱の中身を確認すると慌てて箱を閉めた。

「学、私…これは受け取れない…。」

私は学の顔をまじまじと見つめ言つと、学は慌てて言った。

「あ、深い意味はないんだ！…ただ、デートらしいデートもしてあげた事なかったし、

プレゼントだつて一回もあげた事なかったから…それは俺の気持ち」

俺の気持ち…？

「でも…だつて…気持ちにしたつて…こんな高価な物は…」

値段なんて関係なかった。これが、安物のピアスだろうとプレスレットだろうと…

私には学の気持ちを受け取れない…。

「高価つて程の物でもないよ…。確かに、安物でもないけど…。自分の彼女に気持ちを贈るんだ。コレくらい当然だろ…？」

学はそう言つて笑った。

…私は……

涙が止まらなかった。

単純に嬉し涙なら美しい。

だけど、私は懺悔の念でいっぱいだった……。

例えどんな理由があるにしても、

私が犯した行為は学に対する裏切り行為に他ならない……。

痛いよ………！

学が優しくしてくれれば、くれるほど……胸が痛いよ……。学の気持ちが胸に痛いよ……！

「できないよ……。受け取れないよ……私……。」

学はうれし泣きと受け取り、私を抱き寄せようとする。

私はそれを振りほどいた。

「ダメだよ……ダメなんだよ……。私……。」

ダメ………！

学を失いたくないもう一人のずるい私が邪魔をする……。

「私は……。」

ウソについて学の気持ちを受け取る事なんてできない……！！

「ひな、どうした……？どうしたんだよ……？」

ようやく様子がおかしい私に気付き、学は私の両肩を掴み、優しく訊ねた

「私は……学を裏切った……の……私……っ、私……私……っ牧と寝た……っ！」

言ってしまった…後悔しても、もう遅い…。

学の表情は一瞬にして凍りつく。

「なん…だって…？…今、なんて言った…？…」

私の腕を掴む手に力がかかる…。

「ひな！今なんて言ったんだ…？…なあ？言えよ！…なあ！…」

「……………」

私はギュツと目を閉じる。

学は私の腕から手を離した。

「俺が、ひなを責める資格はないよな…俺だって、今まで散々色々な女と遊んできたんだ」

突き放すように学は吐き捨てた。

「そんな言い方しないで…私達は」

「『私達』！？…なんだよ？本気だったとでも言いたいのか…？」

感情的になる学に私は言った。

「違うよ…！私と牧の間に恋愛感情なんてなかった…でも！」

私が言うのと学は深いため息をついてから私を睨んだ。学は私の心を見透かすように睨んで、こう言った…。

「森繁がいなくなった心の傷を二人で舐め合った…って事だろ…？」

「……………」

図星だ…。

それ以上学は何も言えなかった…。

「最低だ…」

遊びだったって言うてくれたほうが…まだマシだったよ…！」

学は私の手から指輪を奪い返すと、それをゴミ箱に力任せに放った…。

そして私に背を向けて立ち止まった。

「本気になってこういう思いをしたくなかったから…今まで遊んでたんだ…」

そう言つと学は歩き出した…。

私には学に追いつかる資格も、気力も無い…。

バカな女…。

割り切る事も出来ないくせに、忘れる事も出来ないくせに…。

ズルズル引きずつて、結局…一番大事な人を失ってしまった…。

私は最低最悪のバカ女だ…っ。

## 最終話 一番好き！

季節は冬、正月が終わったところだ…

ここ最近の私はいいとこナシだった…。

バイトでも凡ミス連発…新人でもミスしないような…

環境にすぐ影響されて、ダメになる。

私はこんな弱い人間だったんだと痛感する…。

「志摩さん？」

バイト中右京に声をかけられて慌てて謝る私に絶句する右京…。

「わ、私最近怒られ続きでさ、で…何？」

「俺…最近…玲夏ちゃんの事が気になってて…。紹介してもらえませんか？」

「もしかしたら彼氏とまだ続いてるかも知れないけど…。聞いてみるね」

慌てる私にさらに右京は慌てる。

「いーいいいいい。いい！やっぱいい！」

は…？いいの？

私は思った事を口にした。

「…恋愛がなきゃ生きられないバカな男にはなりたくないし…」

去年の秋、あの公園以来…学とは会ってない。もちろん、牧とも…。

「そういえば、あの金髪…名前なんだっけ？最近来ないよね？」そ

ういえば、右京と牧はよくケンカしてたっけ…？

懐かしいな…。あの時は必死だったのに…。

「最近、ガソリンスタンドの人も両替に来なくなっただし…」

…多分、学の事を言ってるのかな…

ガソリンスタンドの人は毎日両替に来るし…。

ただ、学じゃない人なだけ…学、バイト辞めたんだろうか…？

もう関係ない人なのに、気を抜けばすぐ、彼のことを考えてしまう…。

「就職活動に忙しいのかもね…。右京はどうなの？」

「俺？…俺は全然ダメ」

もうすぐ高校卒業する右京でさえ、就職が決まらない…就職難だ。中卒の私は就職の期待なんてできるわけもない…か。ハイハイ…。「地方に行けば学歴関係なく雇ってくれる所もあるらしいけど…俺は遠慮します…」

地方…か。私も考えられないな…。

母親が猛反対しそうだ…。絶対、子離れしてくれそうにないし…。家族から離れて一人、やっていけるのか？…って聞かれたら正直自信は無いな…。そんな事を考えてる時、入り口の自動ドアが開いた。右京はそそくさとどこかへ行ってしまった…

ん…？ああ…ガソリンスタンドの店員か…。

…学？なんだか雰囲気が変わって一瞬わからなかった。

落ち着いたね…。なんだか大人っぽくなったって言うか…。

両替しながらそんな事、考えてた。

学が意を決したように口を開いた。

「バイト終わったら…会えない？」

学とは、あの日以来会ってなくて…

一応…『冷却期間中』って事になってるのかな？…学の中では…。

私の中ではもう、フラれたって思ってたけど…。

あきらめがついていたのに…

改めて学から別れを切り出されるのが怖い…。

また、ずるい私が出てきた…。

「わ、私…っ、今日は早く帰らないと…っ。見たいテレビがあつて

「日向！…！」

学にそう呼ばれて驚いて、黙ってしまった…。

「お願いだ…。10分でいい…。5分でいいから…」



…きちんと自分の口から別れを言わないとスッキリ出来ないって事なんだね…？

「わかった…いいよ。5分だけだったら…」

私がそう言うのと学は少し安心した表情になって、店を出て行った…。バイトが終わるのが怖い、別れを言われるのが怖い…。

この期に及んでまだそんな事を考える自分が恨めしい…。

開き直れ！

男なんて星の数ほど…だ。学だけじゃない。きっと、私の事を好きになつてくれる男はたくさん（？）

いるハズだ！そうに決まつてる！

その中には学以上のイイ男がいて、死ぬほど恋してやるんだから！まいったか！

……。それには、学にフラれるのが第一条件なんだけどね…。

バイトが終わると学が外で待っていて、その顔にドキツとした。思い詰めてる時の顔もかっこいい…

…なんて、最後の最後までバカなことを考えてる…。

「おまたせ！」

自分の考えを打ち消すように学に声をかけた。学は顔を上げ、淋しげな笑顔を私に向けた。

「……………」

なかなか言葉を見つけれない学に、私は言った。

「あと、4分24秒」

「え？」

私の言葉に学は戸惑う。

「ボヤボヤしてたら5分以内に言いたい事言えないで終わっちゃうよ？」

そついう私を怪訝な顔で見つめる学。

「ケジメ…つけに来たんでしょ？」

私この言葉に学がハツとした表情をした。

「…俺、思い詰めた顔してた？」

私はゆっくりと頷いた。

深い深呼吸の後で覚悟を決めて、私は学に言った。

「私はあの日で終わっただんだと思ってた。だから、覚悟はできてる…。  
改めて『別れよう』って言われるのは怖いけど…」

私の言葉に学は慌てて入ってきた。

「ちょ、ちょっと待って！え？なに？？別れるって…？」

私は学の慌てた様子にきょとした。

「え？だって…話があるって言うから…私てつきり…。じゃあ、学の話って…？」

学はヤレヤレと言った風に首を振り、大きな深呼吸をしたあと、私の目を見て言った。

「俺、就職決まった。」

この就職難で就職が決まったと言うおめでたい話。私は自分の事みたいになれしくなった。

「おめでとう！よかったね！！」で、どこに決まったの？」

一瞬の沈黙に『まずい事を聞いたかな？』と思ってしまった。学は相変わらず私の目を見ていて、少し笑って言った。

「東京の会社だよ…東京の電子工業…」

学は東京の会社に行く…それはお互いが離れる事を意味する…

学は別れる気がないみたいだから、遠距離恋愛って事になるのかな

…？

…東京…

そんな都会に行けばこんな田舎の、

こんな女の事なんかすぐに忘れてしまう…。

「ひな、俺についてきて欲しい」

……………！？

聞き返すと、『無理ならいいんだけど』って、言っのが学のクセなんだけど、

重要な事をサラッと言われた気がする…。

私は聞き返さずにはいられなかった。

「ひな…俺と一緒に向こうに行こう？…俺についてきてくれ」

聞き間違いじゃないことがわかって私はうろたえる…。

「思いつきでバカな事を言ってる…って思ってたんだろ…？」

そりゃそうだよ！そんなすぐに破綻してしまいそうな計画…  
真面目に考えるやつなんて…

「真面目に考えたよ。…ずっと考えて、悩んで、俺なりに出した答えなんだ。」

…ひな一人ぐらい俺が面倒見られるよ…贅沢しなければ…」

簡単に大変な事言わないでよ…！！

「そんなこと、福井さんや吉野さんが許すはずない！……それに、学はきつと私を重荷に思うよ…。」

私が不安をぶちまけると学は怪訝な顔をした。

「俺が、ひなを重荷に感じる…？そんな、起こるかどうかわからない事を想像して躊躇するのか…？」

「……………」

嬉しくないわけ、ないじゃない…？

好きだって気持ちだけで突っ走れるなら、すぐにでも『ついて行く』って言ってる。けど、現実を考えずに突っ走れるほど、勇気はないんだよ…。

学は、私の手首をグイッと引き寄せると私を抱きしめた。

「美咲とは…別れたよ…もうホントにお前だけだ。日向…。本当にもう、俺にはお前しかない…。何も考えずに俺について来てくれ…！」

目の前がグラグラして、眩暈が止まらない…。  
学の言葉はまだ続く…。

「一生、そばにいてくれ…。絶対大事にするから…。だから…！」

私を抱きしめる学の体が震えてた…。

好きな男にこんな事を言われて…嬉しくないヤツがいますか…？  
とつくに別れたと思ってた男が…

好きで、好きで仕方ない男がこんな事を言ってくれてる…

でも、不安で仕方ないのも事実で…

家族と離れて、友達と離れて、やっていけるのかな…？遠く離れた土地でもし、学の気持ちが離れたら…？

考えると怖いけど、そんな事ばかり考えてしまうんだ…。

ホントはついていきたい…。

何も考えずに学についていたら、どんなに楽だろう…？

好きだけど、好きだから…色々考えてしまう…。

学は私の体を離し、淋しげな表情を浮かべた。

「すぐに返事しろなんて言わないよ。

…卒業まで、あと1ヶ月半ある。それまで待つてる。卒業してから、向こうに行くまで1週間あるし…。じっくり考えて答えを出して欲しい。」

そう言われてから1ヶ月真剣に考えた…。雪が振る2月の事…。  
私なりに考えて、きちんと答えが出せた。

私は覚悟を決めて、学に会いに行く…。

大事なものをポケットに入れて…。

いざ、学の家の前に立つと呼び鈴を鳴らす指が震える…。

勇気を奮い立たせて、呼び鈴を鳴らすと、すぐに学が出てきた。

「……ごめんね、電話もしないで勝手に来ちゃって…」

緊張のせいで声が震えているのが自分でもわかる…。

「返事…聞かせてくれるんだよね…？」

私はゆっくりと頷き、自らの衝動のままに行動した。

私は学の首に腕を回し、抱きついた。

そして、学を見つめて、戸惑う学に言った。

「学…一番、好き…っ！」

何に対して一番好きなのかはわからない…。世界で一番？今まで会った人の中で一番？生涯で一番？

それは、自分でもわからなかった。

でも、それしか言葉が見つからなかった…。

私はすかさず学にキスした。

ワケもわからず、ただ私を受け入れる学…。

落ち着いて、学から離れた私は言った。

「学の事、好きだよ。…ついていきたい…。

何も考えないで、ついて行きたいよ…。

でも、好きな気持ちだけじゃついて行けない…。

ついて行っても、ただ、学に寄りかかる事しか出来ない。…それが

わかっててついて行く事はできないの。好きだけど、好きだから…  
現実的なことしか考えられなくて…。先の事が不安で…  
私は、あなたにはついて行けない…ついて…行かない…」

私はポケットから取り出したものを学に差し出す。

「これ…。以前私にくれようとした指輪。学が捨てた指輪。…なんか、捨てたままに出来なくて…私が拾って、持ってた…。これ、返すね。学が『俺の気持ち』だって、くれた指輪…。  
私の見てないところで捨てて。じゃないと私、また拾っちゃいそうだから…。」

私はそう言って学に指輪を手渡した。

「プレゼント、突き返してきた女なんて、お前が初めてだよ、日向…！」

これ以上ないくらい切ない表情で言った後、学は思いつき私を抱きしめた。

「俺をフツた事、一生後悔するかもよ…」

「…かもね。心変わりして、当日一緒に行くって言い出すかも…」

そう言って私は冗談めかしに笑った。

「いつ、行くの？…私、見送りする…」

きちんと恋を終わらせるために…

「3月の…」

「それ…私の誕生日だ…。」

私は毎年、誕生日にはよくない事が起こる。

でも、今年の誕生日は、ホントの意味で新しい私になれますように…。

私の誕生日、学の出発の日…。私は学を見送るため、空港にいた。辺りはごみごみしていて、なかなか学を見つけれなかった。

「日向！」

この人ごみの中私を見つけて声をかけてきた人がある…。振り返ると牧だった。

「『なんだ牧か』…って顔すんなよな…お前ってホント顔に出る…」

そう言いながら牧は私を別の場所まで案内した。人の少ない休憩所に来て、私は牧に尋ねた。

「牧も学の見送り？」

牧は言い辛そうに私の顔を見て、覚悟を決めて言った。

「日向、学はもう行ったよ…。」

「……！」

私はやり場のない怒りで牧につつかかった。

「どうして！？学は2時46分の便で行くって…」



牧は辛そうな表情を浮かべてやっとで言葉を吐き出した。

「…。その前の…1時5分の便で、行っただ…。」

私は何も言う事が出来なくなってしまった…。

「『日向にさよならって言われたら泣きそうだから会わないで行く』ってさ。」

しかし、あいつがそこまで女にハマるとはね…。」

半泣きの私に牧は続ける。

「実はさ…俺と日向がその…なんだ、た事…日向が学に言ったの…？  
なんですかあいつ知っててさ、…俺、あいつに殴られた…」

それでもか…って程、殴られたよ…。  
女の事で学があんな風になるの初めてだ。うん…なんていうか…  
日向の事、本気だったんだな…ってさ」

…そんな事、今更聞いても…。

「あと、伝言…『俺も一番好きだ』…ってさ。」

…遅いよ…。

そんな事、今更聞いても遅いよ…。学…！！

涙がブワツと溢れてきて、止まらなかった。

私はずっと、泣き続けた。そんな私を牧はずっと見守っていた…。

「色々あったよ。日向と会ってからの数ヶ月間は特に…」

「…私毛」

泣きつかれた目に痛いくらい夕日はまぶしかった。

「あさってから、俺も東京で就職だ…。でも、この数ヶ月は忘れられないよ」

「…うん…私も忘れないよ。学も、牧も…麻美ちゃんも…」

それぞれ、別々の道、進んで、きつい事もあるだろうけど、忙しい日々もあるだろうけど…

16・17・18歳…自分の中で一番輝いたこの日、この時を勲章にして

私はこれからも生きていく…！

## 最終話 一番好き！（後書き）

自サイトから引っ張って手直した作品です。

初めての作品だけに特別な思い入れのある作品です。

最後まで読んでいただき本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1226f/>

---

キミに逢えたから

2010年10月28日01時03分発行